

6 コンクリート工事	① コンクリートの種類等 (6.2.1)	類別 ※I類 (JIS A 5308 への適合を認証されたコンクリート) ※II類 (JIS A 5308 に適合したコンクリート) (6.2.1) <table border="1"> <tr> <td>設計基準強度 (N/mm²)</td> <td>気乾単位容積質量 (t/m³)</td> <td>スラブ</td> <td>適用箇所</td> </tr> <tr> <td>○24</td> <td>2.3程度</td> <td>○15又は18・18</td> <td>躯体全て</td> </tr> <tr> <td>・</td> <td>・</td> <td>・</td> <td>・</td> </tr> <tr> <td>・</td> <td>・</td> <td>・</td> <td>・</td> </tr> <tr> <td>・</td> <td>・</td> <td>・</td> <td>・</td> </tr> <tr> <td>・</td> <td>・</td> <td>・</td> <td>・</td> </tr> </table> 構造体強度補正值(S) ※標準仕様書表6.3.2による 補正值S=3 (3月3日~7月10日、9月11日~11月18日) S=6 (7月11日~9月10日、11月19日~3月2日) (6.3.2)	設計基準強度 (N/mm ²)	気乾単位容積質量 (t/m ³)	スラブ	適用箇所	○24	2.3程度	○15又は18・18	躯体全て	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	⑭ 無筋コンクリート (6.14.1)	コンクリートの種類 ※普通コンクリート セットの種類 ※普通ポルトランドセメント、高炉セメントA種、シリカセメントA種又はフライアッシュセメントA種 ・高炉セメントB種 ⑥ ・フライアッシュセメントB種 ⑥ 設計基準強度 ※18 (N/mm ²) スラブ ※15cm又は18cm 適用箇所 ※標準仕様書6.14.1(4)による箇所 ・図示による ()	鉄骨部材への溶接方法 ○図示による (S-12) 耐火認定 ○あり (耐火時間) ○図示による () 頭付きスタッド (JIS B 1198) の種類等 (7.2.8)(7.7.6) <table border="1"> <tr> <th>呼び名</th> <th>呼び長さ (mm)</th> <th>適用箇所</th> </tr> <tr> <td>○J6</td> <td>80</td> <td>2F梁</td> </tr> <tr> <td>・19</td> <td>・</td> <td>・</td> </tr> <tr> <td>・22</td> <td>・</td> <td>・</td> </tr> </table>	呼び名	呼び長さ (mm)	適用箇所	○J6	80	2F梁	・19	・	・	・22	・	・	⑭ スタッド (7.2.8)(7.7.6) ⑭ 柱底均しモルタル (7.2.9) ⑭ 製作精度 (7.3.3) ⑭ 溶接技者の技量付加試験 (7.6.3) ⑭ 溶接接合 (7.6.4) ⑭ 入熱、パス間温度の管理 (7.6.12) ⑭ 溶接部の試験 (7.8.2)	⑭ 溶融垂鉛めつき (基礎、主要構造部及びその他構造耐力上主要な部分に限る。) (7.12.4)(表14.2.2) <table border="1"> <tr> <th>垂鉛めつきの種類</th> <th>材料</th> <th>適用部位</th> </tr> <tr> <td>○A種</td> <td>最小板厚6.0mm以上の形鋼、鋼板</td> <td rowspan="3">屋外露出部</td> </tr> <tr> <td>○B種</td> <td>最小板厚3.2mm以上、6.0mm未満の形鋼、鋼板</td> </tr> <tr> <td>○C種</td> <td>普通ポルトランド・ナット類、アンカーボルト類 最小板厚2.3mm以上、3.2mm未満の形鋼、鋼板</td> </tr> </table> ⑭ 梁貫通孔の補強 補強形式 ○図示による (構造関係共通図(鉄骨標準図)1-6) 適用箇所 ○図示による ()	垂鉛めつきの種類	材料	適用部位	○A種	最小板厚6.0mm以上の形鋼、鋼板	屋外露出部	○B種	最小板厚3.2mm以上、6.0mm未満の形鋼、鋼板	○C種	普通ポルトランド・ナット類、アンカーボルト類 最小板厚2.3mm以上、3.2mm未満の形鋼、鋼板
	設計基準強度 (N/mm ²)	気乾単位容積質量 (t/m ³)	スラブ	適用箇所																																																	
○24	2.3程度	○15又は18・18	躯体全て																																																		
・	・	・	・																																																		
・	・	・	・																																																		
・	・	・	・																																																		
・	・	・	・																																																		
呼び名	呼び長さ (mm)	適用箇所																																																			
○J6	80	2F梁																																																			
・19	・	・																																																			
・22	・	・																																																			
垂鉛めつきの種類	材料	適用部位																																																			
○A種	最小板厚6.0mm以上の形鋼、鋼板	屋外露出部																																																			
○B種	最小板厚3.2mm以上、6.0mm未満の形鋼、鋼板																																																				
○C種	普通ポルトランド・ナット類、アンカーボルト類 最小板厚2.3mm以上、3.2mm未満の形鋼、鋼板																																																				
② セメント (6.3.1)	種類 ※普通ポルトランドセメント、高炉セメントA種、シリカセメントA種又はフライアッシュセメントA種 適用箇所 (※下記以外全て) 普通ポルトランドセメントの品質は、JIS R 5210 に示された規定の他、水和熱が7日目で 352 J/g以下、かつ28日目で 402 J/g以下のものとする。 ・高炉セメントB種 ⑥ 適用箇所 (・1FLより下部(立上り部含む)) ・フライアッシュセメントB種 ⑥ 適用箇所(・)	⑮ コンクリートの単位水量測定	試験の要領 ・図示による () 開先の形状 ○図示による (構造関係共通図(鉄骨標準図)1-2 溶接継手の種類別開先標準) エンドタブの切除する部分 切断する場所 ・図示による () 切断範囲 ・エンドタブ、裏当て金等は、梁フランジ等の端から 5mm 以上残して直線上に切断する。なお、切断線が交差する場合は、交差点をアール状に加工する。 切断面の仕上げ ・標準仕様書7.6.7(1)(a)②による	⑮ 鉄骨製作工場 (7.1.3) ⑮ 施工管理技術者 (7.1.3.4) ⑮ 鋼材 (7.2.1) ⑮ 高力ボルト (7.2.2) ⑮ 普通ボルト (7.2.3)(7.5.2) ⑮ アンカーボルト (7.2.4)(7.10.3) ⑮ 溶接材料 (7.2.5) ⑮ ターンバックル (7.2.6) ⑮ 床構造用のデッキプレート (7.2.7)(7.7.8)	⑮ 設備関連 (7.8.4) ⑮ その他 (7.8.4)																																																
③ 骨材 (6.3.1)	アルカリシリカ反応性による区分 ※A ・B (コンクリート中のアルカリ総量が 3.0 kg/m ³ 以下)	⑰ 鉄骨工事	⑰ 溶接接合 (7.6.4) ⑰ エンドタブの切除する部分 (7.6.7)	⑰ 鋼材 (7.2.1) <table border="1"> <tr> <th>種類の記号</th> <th>適用箇所 (主要な部分)</th> <th>規格</th> </tr> <tr> <td>SS400</td> <td>小梁、間柱</td> <td>○JIS規格による</td> </tr> <tr> <td>SN400B</td> <td>大梁</td> <td>○JIS規格による</td> </tr> <tr> <td>BCR235</td> <td>柱</td> <td>○JIS規格による ○大径認定</td> </tr> <tr> <td>STR400</td> <td>間柱</td> <td>○JIS規格による</td> </tr> </table>	種類の記号	適用箇所 (主要な部分)	規格	SS400	小梁、間柱	○JIS規格による	SN400B	大梁	○JIS規格による	BCR235	柱	○JIS規格による ○大径認定	STR400	間柱	○JIS規格による	⑰ 鋼材 (7.2.1)	⑰ 鋼材 (7.2.1)																																
種類の記号	適用箇所 (主要な部分)	規格																																																			
SS400	小梁、間柱	○JIS規格による																																																			
SN400B	大梁	○JIS規格による																																																			
BCR235	柱	○JIS規格による ○大径認定																																																			
STR400	間柱	○JIS規格による																																																			
④ 混和材料 (6.3.1)	・混和剤 混和剤の種類 ※標準仕様書6.3.1(4)(a)による ・混和剤 混和剤の種類 ※標準仕様書6.3.1(4)(b)による	⑰ 鋼材 (7.2.1)	⑰ 鋼材 (7.2.1)	⑰ 鋼材 (7.2.1)	⑰ 鋼材 (7.2.1)																																																
⑤ 打継ぎの位置、ひび割れ誘発目地、打継ぎ目地 (6.6.4)	打継ぎの位置 梁及びスラブ ※スパンの中央又は端から1/4の付近 ・図示による () 柱及び壁 ※スラブ、壁梁又は基礎の上端 ・図示による ()	⑰ 鋼材 (7.2.1)	⑰ 鋼材 (7.2.1)	⑰ 鋼材 (7.2.1)	⑰ 鋼材 (7.2.1)																																																
⑥ 温潤養生 (6.7.2)	温潤養生の期間 ・セメントの種類が普通エコマセメントの場合 () 日	⑰ 鋼材 (7.2.1)	⑰ 鋼材 (7.2.1)	⑰ 鋼材 (7.2.1)	⑰ 鋼材 (7.2.1)																																																
⑦ コンクリートの仕上り (6.2.5)(6.8.2)	合板せき板を用いるコンクリートの打放し仕上げ 種類 適用箇所 ○A種 ※図示による () ・B種 ※図示による () ・C種 ※図示による () コンクリートの仕上りの平たんさ 種類 適用箇所 ○A種 ※図示による () ・B種 ※図示による () ・C種 ※図示による ()	⑰ 鋼材 (7.2.1)	⑰ 鋼材 (7.2.1)	⑰ 鋼材 (7.2.1)	⑰ 鋼材 (7.2.1)																																																
⑧ 打増し厚さ (打放し仕上げ部) (6.8.1)	打増し厚さ ○打放し仕上げの打増し厚さ(外部に面する部分に限る) ○20mm ○打放し仕上げの打増し厚さ(内部に面する部分に限る) ○10mm ・20mm ・外装タイル後張り面の打増し処理 ・20mm	⑰ 鋼材 (7.2.1)	⑰ 鋼材 (7.2.1)	⑰ 鋼材 (7.2.1)	⑰ 鋼材 (7.2.1)																																																
⑨ 型枠 (6.8.2)	打増し範囲 ○図示による () せき板の材料及び厚さ ○合板 (※12mm) ⑥ コンクリート打設時の充填性の確認のため、型枠の一部に透明型枠等を使用する場合は、強度、変形等について、事前に監督員と協議する。 ・断熱材を兼用した型枠の使用 適用箇所 ・図示による () ・MCR工法用シートの使用 適用箇所 ・図示による () 打増し厚さ ・20mm 打増し範囲 ・図示による () スリーブの材質・規格等 ○図示による (S-09)	⑰ 鋼材 (7.2.1)	⑰ 鋼材 (7.2.1)	⑰ 鋼材 (7.2.1)	⑰ 鋼材 (7.2.1)																																																
⑩ 軽量コンクリート (6.10.1.2)	適用箇所 ・図示による () 種類 ・1種 ・2種 気乾単位容積質量 ・標準仕様書表6.10.11による スラブ ※21cm	⑰ 鋼材 (7.2.1)	⑰ 鋼材 (7.2.1)	⑰ 鋼材 (7.2.1)	⑰ 鋼材 (7.2.1)																																																
⑪ 寒中コンクリート (6.11.1.2)	適用期間 (月 日~ 月 日) 構造体強度補正值(S)を換算温度を基に定める場合 ・図示による ()、S= ()	⑰ 鋼材 (7.2.1)	⑰ 鋼材 (7.2.1)	⑰ 鋼材 (7.2.1)	⑰ 鋼材 (7.2.1)																																																
⑫ 暑中コンクリート (6.12.2)	適用期間 (月 日~ 月 日) 構造体強度補正值(S) ※0N/mm ² ・図示による ()、S= ()	⑰ 鋼材 (7.2.1)	⑰ 鋼材 (7.2.1)	⑰ 鋼材 (7.2.1)	⑰ 鋼材 (7.2.1)																																																
⑬ マスコンクリート (6.13.1.2)	適用箇所 ・図示による () セメントの種類 ・普通ポルトランドセメント ・中庸熱ポルトランドセメント ・低熱ポルトランドセメント ・高炉セメントB種 ・フライアッシュセメントB種 ・シリカセメント 混和材料の適用 ・あり (・標準仕様書6.13.2(2)(7)による ・標準仕様書6.13.2(2)(4)による) スラブ ※15cm 構造体強度補正值(S) ※標準仕様書表6.13.1による	⑰ 鋼材 (7.2.1)	⑰ 鋼材 (7.2.1)	⑰ 鋼材 (7.2.1)	⑰ 鋼材 (7.2.1)																																																

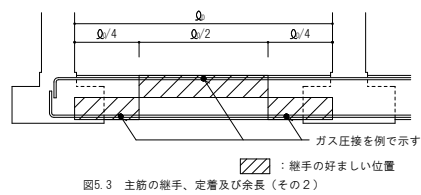
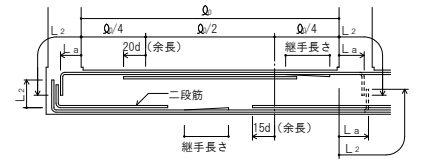


図5.3 主筋の継手、定着及び余長（その2）

(4) 連続基礎及びべた基礎の場合の主筋の継手、定着及び余長は、図5.4による。（耐圧スラブがつく場合を含む）



(注) 1. 図示のない事項は、7.1による。
2. 印は、継手及び余長位置を示す。
3. 破線は、柱内定着の場合を示す。
4. 梁主筋のみ込み長さ（柱せいの3/4倍以上）

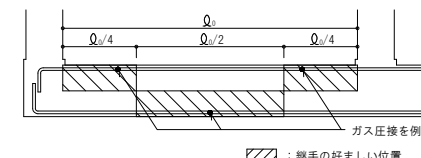


図5.4 主筋の継手、定着及び余長（その3）

5.2 基礎梁のあばら筋等

(1) 一般事項
(ア) あばら筋の径および間隔は、設計図による。
(イ) あばら筋組立の形及びフックの位置は、7.2(2)による。
また、副あばら筋組立の形及びフックの位置は7.2(3)による。
ただし、梁の上下端にスラブが付く場合で、かつ、梁せいが1.5m以上の場合は、図5.5によることができる。

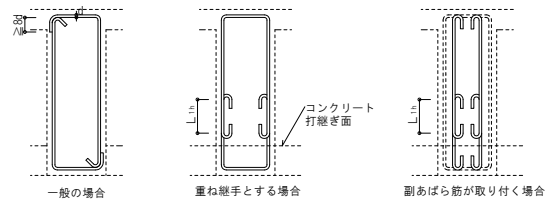
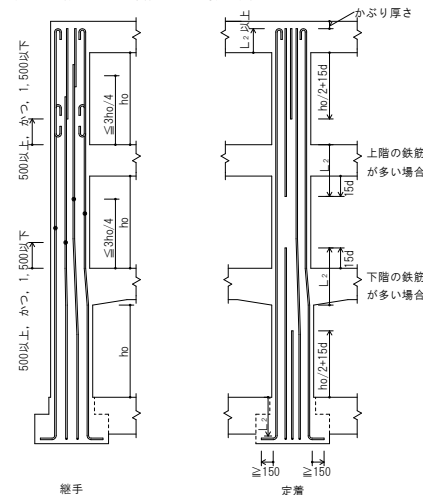


図5.5 あばら筋組立の形及びフックの位置

(2) 腹筋及び幅止め筋は、7.2による。ただし、梁せいが1.5m以上の場合は設計図による。
(3) あばら筋の割付けは、7.2(4)による。

6.1 柱

(1) 一般事項
(ア) 継手中心位置は、梁上端から500mm以上、1,500mm以下、かつ、3h/4 (hは柱の内法高さ) 以下とする。
(イ) 継手、定着及び余長は、図6.1による。
ただし、柱頭定着長さL2が確保できない場合は、設計図による。



(注) 1. 柱の四隅にある主筋で、重ね継手の場合及び最上階の柱頭にある場合には、フックを付ける。
2. 隣り合う継手の位置は、表3.2「隣り合う継手の位置」による。
3. 継手及び定着は、すべての階に適用できる。

図6.1 柱主筋の継手、定着及び余長

(2) 柱打増し部
(ア) 打増し部分に、壁、梁及びスラブ等がとりつく場合は、壁、梁及びスラブ筋等の定着長さには、打増し部分を含まない。
(イ) 土に接する柱周囲の打増しは図6.2による。

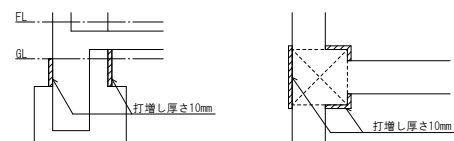


図6.2 柱打増し部

6.2 帯筋

(1) 帯筋の種類及び間隔は、設計図による。
(2) 帯筋組立の形は図6.3(イ)による。適用は構造図による。構造図に記載がなければ次による。
(ア) 形は、図6.3(イ)とする。
ただし、H形の135°曲げのフックが困難な場合は、W-I形とする。
(イ) 溶接する場合の溶接長さLは、両面重ねアーク溶接の場合は5d以上、片面重ねアーク溶接の場合は10d以上とする。
(ウ) S P形において、柱頭及び柱脚の端部は1.5巻以上の添巻きを行う。

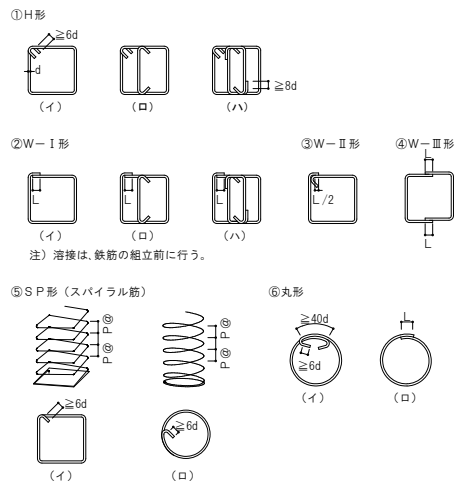
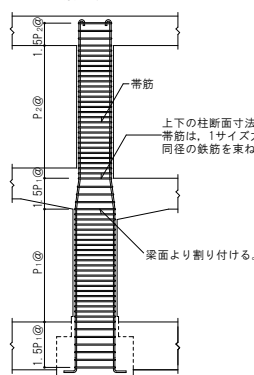


図6.3 帯筋組立の形

(3) フック及び継手の位置は交互とする。
(4) 帯筋の割付けは図6.4とし、それ以外の場合は設計図による。



(注) 1. 柱に取り付く段差がある場合、帯筋の間隔を1.5P@または1.5P@とする範囲は、その柱に取り付くすべての梁を考慮して適用する。
2. 図中のP1@、P2@は、特記された帯筋の間隔を示す。

図6.4 帯筋の割付け

7.1 大梁

(1) 一般事項
(ア) 梁の上がり下がり又はFLを基準とした寸法値とする。
(イ) 地中梁下の砂利地層厚及び捨てコンクリート地層厚は設計図による。
(ウ) 打増し部分に、スラブ、壁、梁筋等が取り付く場合は、スラブ、壁、梁筋等の定着長さには、打増し部分を含まない。
(2) 大梁主筋の継手及び定着の一般事項
(ア) 継手中心位置は、次による。
上端筋：中央 Q/2以内
下端筋：柱より梁せいの(D)以上離し、Q/4を加えた範囲以内
(イ) 継手中央部の位置、定着長さ及び余長は図7.3及び図7.4による。
(ウ) 梁筋は、連続端で柱に接する梁の主筋が、同数の時は柱をまたいで引き通すものとし、鉄筋の本数が異なる場合には、図7.1のように反対側の梁に定着する。外端部や隅部では、折り曲げて定着する。

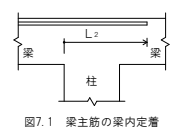


図7.1 大梁主筋の梁内定着

(エ) 梁主筋を柱内に折り曲げて定着する場合は次による。
なお、定着の方法は3(2)(イ)による。
上端筋：曲げ降ろす
下端筋（一般）：原則、曲げ上げる。
下端筋（ハンチ付き）：原則、曲げ上げる。
(オ) 梁にハンチをつける場合、その傾斜は設計図による。
(カ) 段違い梁は、図7.2による。

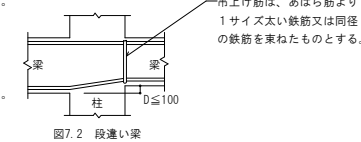
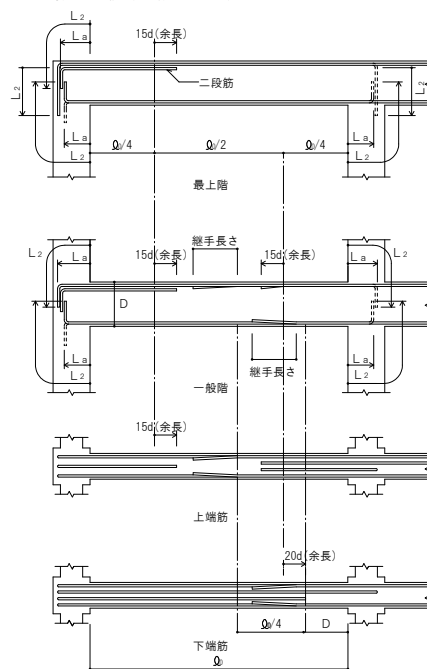


図7.2 段違い梁

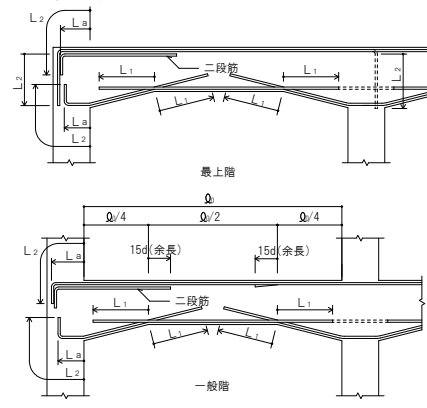
(3) ハンチのない場合の重ね継手、定着及び余長は、図7.3による。



(注) 1. 梁主筋の重ね継手は、梁の出隅及び下端の両端にある場合（基礎梁を除く）には、フックを付ける。
2. 印は、継手及び余長を示す。
3. 破線は、柱内定着の場合を示す。
4. 梁主筋のみ込み長さ（柱せいの3/4倍以上）

図7.3 大梁の重ね継手、定着及び余長

(4) ハンチのある場合の定着及び余長は、図7.4による。



(注) 1. 梁主筋の重ね継手は、梁の出隅及び下端の両端にある場合（基礎梁を除く）には、フックを付ける。
2. 印は、継手及び余長を示す。
3. 梁内定着の端部下端筋が接近するときは、*****のように引き通すことができる。
4. 破線は、柱内定着を示す。
5. 梁主筋のみ込み長さ（柱せいの3/4倍以上）

図7.4 ハンチのある大梁の定着及び余長

7.2 あばら筋等

(1) あばら筋、腹筋及び幅止め筋の一般事項
(ア) あばら筋の種類、径及び間隔は、設計図による。
(イ) 腹筋に継手を設ける場合の継手長さは、150mm程度とし、定着長さは図7.6による。
ただし、腹筋を計算上考慮している場合の継手長さは、定着長さは設計図による。
(ウ) 幅止め筋及び受け用幅止め筋は、D10-1,000@程度とする。

(2) あばら筋組立の形及びフックの位置
(ア) 形は、図7.5.1(イ)とする。
ただし、L形梁の場合は、②または③、T形梁の場合は②～④とすることができる。

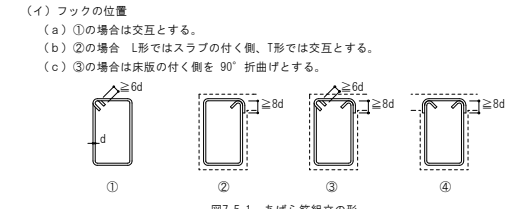


図7.5.1 あばら筋組立の形

(3) 副あばら筋組立の形及びフックの位置
(ア) 形は、図7.5.2(イ)または(ロ)とする。
ただし、L形梁またはT形梁の場合は⑦とすることができる。

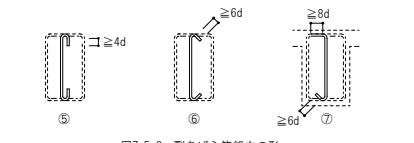
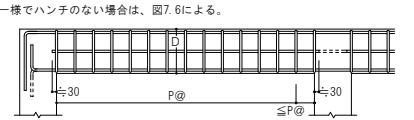


図7.5.2 副あばら筋組立の形

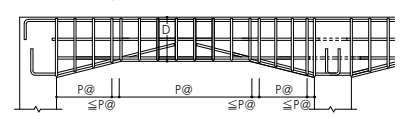
(4) あばら筋の割付け
(ア) 間隔が一様でハンチのない場合は、図7.6による。



(注) 1. あばら筋は、柱面の位置から割り付ける。
2. 図中のP@は、特記されたあばら筋の間隔を示す。

図7.6 あばら筋の割付け（その1）

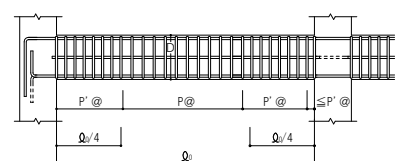
(イ) 間隔が一様でハンチのある場合は、図7.7による。



(注) 1. あばら筋は、柱面の位置から割り付ける。
2. 図中のP@、P'@は、特記されたあばら筋の間隔を示す。

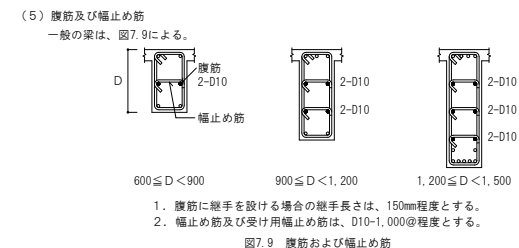
図7.7 あばら筋の割付け（その2）

(ウ) 梁の端部で間隔の異なる場合は、図7.8による。



(注) 1. あばら筋は、柱面の位置から割り付ける。
2. 図中のP@、P'@は、特記されたあばら筋の間隔を示す。

図7.8 あばら筋の割付け（その3）

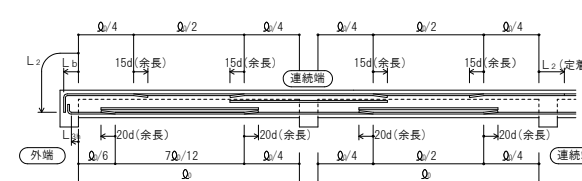


(注) 1. 腹筋に継手を設ける場合の継手長さは、150mm程度とする。
2. 幅止め筋及び受け用幅止め筋は、D10-1,000@程度とする。

図7.9 腹筋および幅止め筋

7.3 小梁

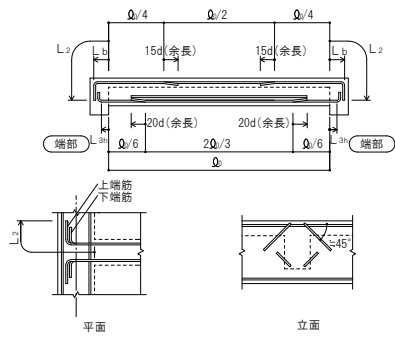
(1) 小梁主筋の継手、定着及び余長
連続小梁の場合は、図7.10による。



(注) 1. 図示のない事項は、5.1及び7.1に準ずる。
2. 印は、余長位置を示す。

図7.10 小梁主筋の継手、定着及び余長（その1）

(2) 単独小梁の場合は、図7.11による。



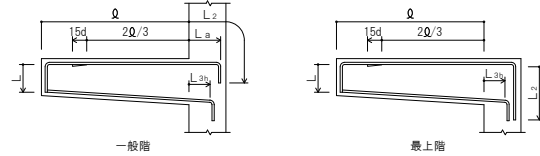
直交する梁へ斜めに定着する場合
 (注) 1. 図示のない事項は、5.1及び7.1に準ずる。
 2. 印は、余長位置を示す。
 図7.11 小梁主筋の継手、定着及び余長 (その2)

(3) あばら筋は、7.2による。

7.4 片持梁

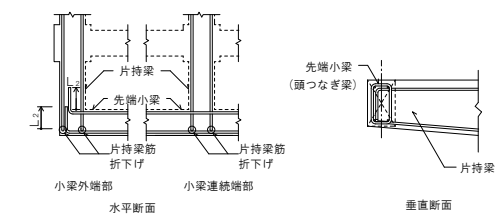
(1) 片持梁主筋の定着及び余長

(ア) 先端に小梁のない場合は、図7.12による。



(注) 1. 図示のない事項は、7.1による。
 2. 印は、余長位置を示す。
 3. 先端の折曲げの長さLは、梁せいからかり厚さを除いた長さとする。
 図7.12 片持梁主筋の定着及び余長

(イ) 先端に小梁がある場合は、図7.13による。



(注) 1. 図示のない事項は、(ア)による。
 2. 先端小梁終端部の主筋は、片持梁内に水平定着する。
 3. 先端小梁の連続端は、片持梁の先端を貫通する通し筋としてよい。
 図7.13 片持梁主筋の定着

(2) あばら筋は、7.2による。

8.1 壁

(1) 一般事項

(ア) 一般壁筋の重ね継手の長さはLとし、耐力壁筋の重ね継手長さは特記による。また定着の長さはLとし、鉄筋の継手位置は、柱・梁部以外とする。

(イ) 幅止め筋は、縦横ともD10-1,000@程度とする。

(ウ) 打増し部分に、壁及びスラブ等が取り付く場合は、壁及びスラブ筋等の定着長さには打増し部分は含まない。

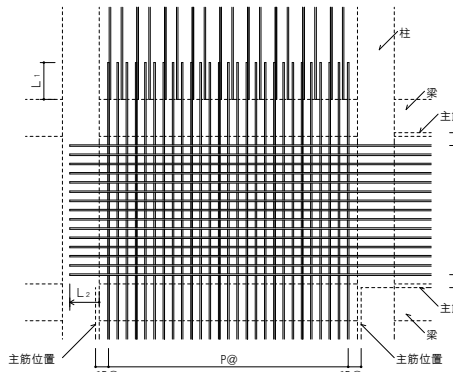


図8.1 壁の配筋 (注) 図中のP@は、特記された壁筋の間隔を示す。

(2) 壁の配筋は表8.1により、種別は設計図による。

表8.1 壁の配筋

種別	縦筋及び横筋	断面図 (mm)
W12	D10-200#シングル	120
W15A	D10-150#シングル	150
W15B	D10-100#シングル	150
W18A	D10-200#ダブル	180
W18B	D10-150#ダブル	180
W20A	D10-200#ダブル	200
W20B	D10-150#ダブル	200

(注) 壁筋の配筋順序は、規定しない。

(3) 片持スラブ形階段を受ける壁の配筋は表8.2により、種別は設計図による。

表8.2 片持スラブ形階段を受ける壁の配筋

種別	縦筋及び横筋	断面図 (mm)	階段の配筋種別(表10.1)
KW1	縦筋	D13-200#ダブル	KA1
	横筋	D10-200#ダブル	
KW2	縦筋	D13-150#ダブル	KA2
	横筋	D10-200#ダブル	

(注) 縦筋は、横筋の外側に配筋する。

(4) 土圧を受ける壁の配筋は、設計図による。

(5) 壁の交差部及び端部の配筋は、図8.2による。

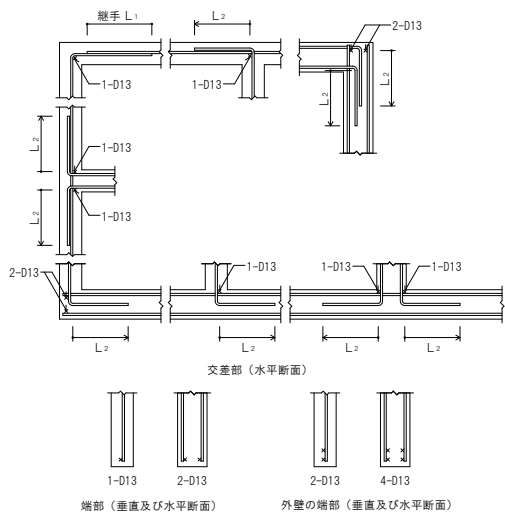


図8.2 壁の交差部及び端部の配筋

8.2 一般壁の補強

(1) 壁開口部の補強

(ア) 耐力壁を除く壁開口部の補強筋は、A形は表8.3、B形は表8.4とし、適用は構造図による。なお、耐力壁の補強筋は、構造図による。

表8.3 壁開口部補強筋 (A形)

壁の種別	補強筋	
	縦横	斜め
W12, W15	1-D13	1-D13
W18, W20	2-D13	2-D13

表8.4 壁開口部補強筋 (B形)

壁の種別	補強筋	
	縦横	斜め
W12, W15	2-D13	1-D13
W18, W20	4-D13	2-D13

(イ) 壁開口部補強の定着長さは、図8.3による。

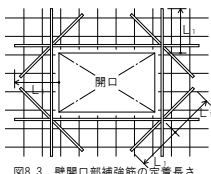


図8.3 壁開口部補強筋の定着長さ

(2) コンセントボックス等を壁に埋め込む場合の補強は、設計図による。

9.1 スラブ

- スラブ及び土間コンクリートの上り下りは、FLを基準とした寸法とする。
- 土間スラブ下の砂利地床厚及び捨てコンクリート厚は設計図による。
- 土間コンクリート補強筋(D0)の配筋及びコンクリート厚さは設計図による。
- スラブの配筋(S形配筋)は表9.1及び図9.1により、配筋種別及びスラブ厚さは、設計図による。

表9.1 S形配筋

配筋種別	短辺方向 (主筋) 全域		長辺方向 (配力筋) 全域	
	短辺方向 (主筋) 全域	長辺方向 (配力筋) 全域	短辺方向 (主筋) 全域	長辺方向 (配力筋) 全域
S 1	D13-100#	D13-100#	S 8	D10, D13-150#
S 2	同上	D13-150#	S 9	同上
S 3	同上	D10, D13-150#	S10	D10, D13-200#
S 4	D13-150#	D13-150#	S11	同上
S 5	同上	D10, D13-150#	S12	同上
S 6	同上	D10-150#	S13	D10-200#
S 7	D10, D13-150#	D10, D13-150#	S14	同上

(注) 上端筋、下端筋とも同一配筋とする。

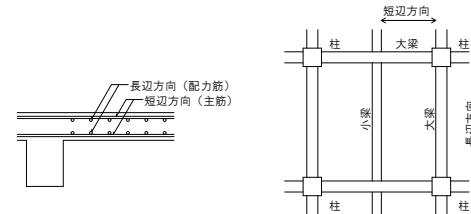


図9.1 スラブの配筋

- 配筋の割付けは、中央から行い、端部は定められた間隔以下とする。
- 原則として引き渡し、鉄筋の重ね継手長さはLとし、とする。
- 定着長さ及び受け筋は、図9.2による。ただし、引き渡すことができない場合は、図9.3により梁内に定着する。

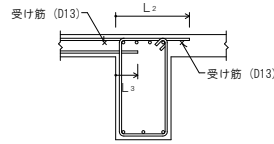


図9.2 スラブ筋の定着長さ及び受け筋 (その1)

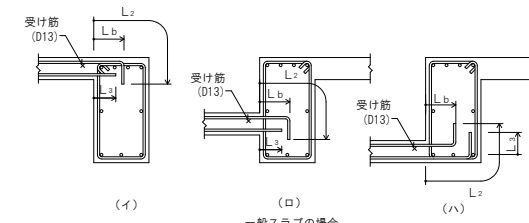


図9.3 スラブ筋の定着長さ及び受け筋 (その2)

9.2 片持スラブ

片持スラブは、プレキャストコンクリート部材又は現場打ちコンクリート部材とする。プレキャストコンクリート部材とする場合の躯体への接続方法は、設計図による。

片持スラブの配筋は、次による。

(1) 片持スラブの配筋 (CS形配筋) は、表9.2並びに図9.4及び図9.5により、配筋種別及びスラブ厚さは、設計図による。

表9.2 CS形配筋

配筋種別	主筋		配筋種別	主筋	
	上	下		上	下
CS1	上	D13-100#	CS5	上	D10-200#
	下	D13-200#		下	D10-400#
CS2	上	D13-150#	CS6	上	D10, D13-200#
	下	D13-300#		下	—
CS3	上	D10, D13-150#	CS7	上	D10-200#
	下	D10, D13-300#		下	—
CS4	上	D10, D13-200#			
	下	D10-200#			

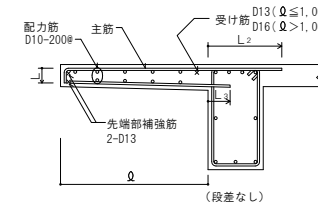


図9.4 片持スラブの配筋 (CS11 からCS15)

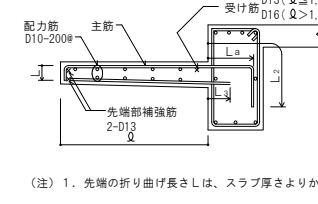


図9.5 片持スラブの配筋 (CS16及びCS17)

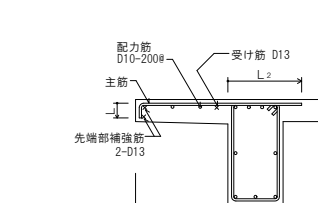


図9.6 先端に壁が付く場合の配筋

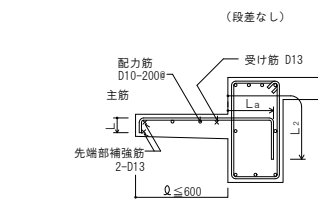


図9.7 片持ちスラブ出隅部の補強配筋

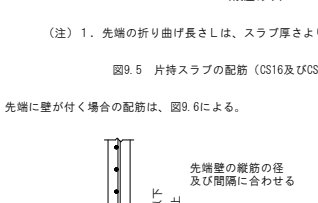


図9.8 出隅部の補強配筋

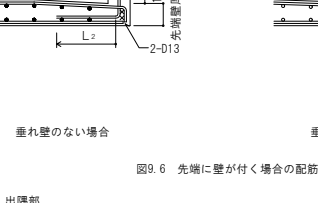


図9.9 出隅部補強配筋

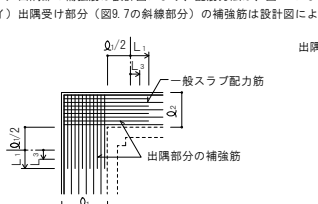


図9.10 出隅部補強配筋

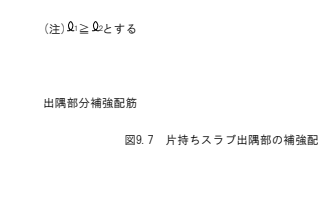


図9.11 出隅部補強配筋

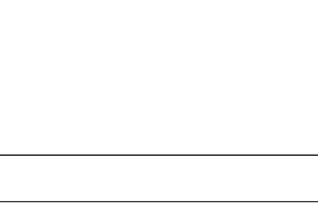
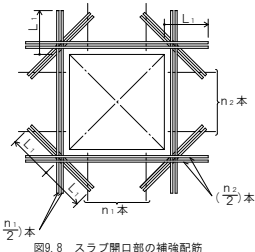


図9.12 出隅部補強配筋

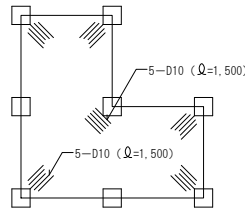
9.3 スラブ等の補強

- (1) スラブ開口部の補強
 スラブ開口部の補強方法は、設計図による。設計図になければ、(ア)イによる。
 (ア) スラブ開口部の最大径が700mm以下の場合、図9.8により開口部によって切られる鉄筋と同量の鉄筋で周囲を補強し、隅角部に斜め方向に2-D13 (Q=2L) シングルを上下筋の内側に配筋する。

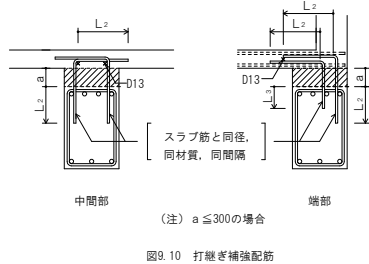


- (イ) スラブ開口部の最大径が両方向の配筋間隔以下で、鉄筋を緩やかに曲げることで、開口部を避けて配筋できる場合は、補強を省略することができる。

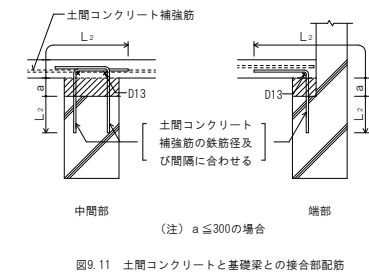
- (2) 屋根スラブの補強
 屋根スラブの出隅及び入隅部分には、図9.9により、補強筋を上端筋の下側に配置する。



- (3) 土間スラブの打継ぎ補強
 基礎梁とスラブを一体打ちとしないで、打継ぎを設ける場合の補強は図9.10による。ただし、土間スラブとは、土に接するスラブでS形の配筋によるものをいう。



- (4) 土間コンクリートの補強
 土間コンクリートの補強筋は、設計図による。なお、基礎梁との接合部は、図9.11による。

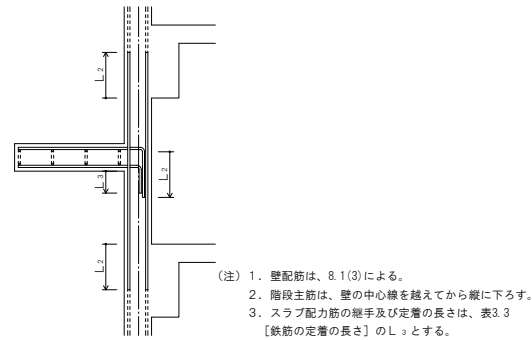


10.1 片持スラブ形階段

片持スラブ形階段の配筋は、表10.1及び図10.1により、寸法及び配筋種別は、設計図による。

表10.1 片持スラブ形階段の配筋 t:スラブ厚さ

配筋種別	KA1	KA2
配筋図		
配筋種別	KA3	KA4
配筋図		



- (注) 1. 壁配筋は、8.1(3)による。
 2. 階段主筋は、壁の中心線を越えてから壁に下ろす。
 3. スラブ配力筋の継手及び定着の長さは、表3.3【鉄筋の定着の長さ】のLとする。

10.2 二辺固定スラブ形階段

二辺固定スラブ形階段は、プレキャストコンクリート部材又は現場打ちコンクリート部材とする。プレキャストコンクリート部材とする場合の躯体への接続方法は設計図による。

二辺固定スラブ形階段の配筋は表10.2並びに図10.2及び図10.3により、寸法及び配筋種別は、設計図による。

表10.2 二辺固定スラブ形階段

配筋種別	上端筋、下端筋とも(全域)
KB1	D13-200#
KB2	D13-150#
KB3	D13-100#
KB4	D13, D16-150#
KB5	D16-150#
KB6	D16-125#
KB7	D16-100#

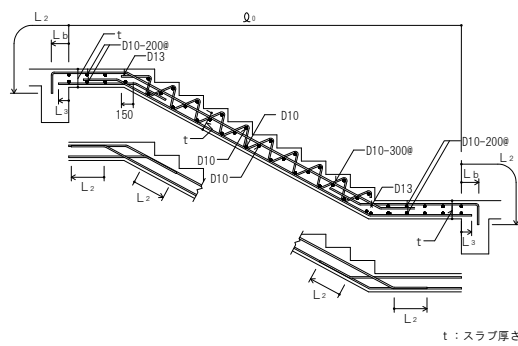
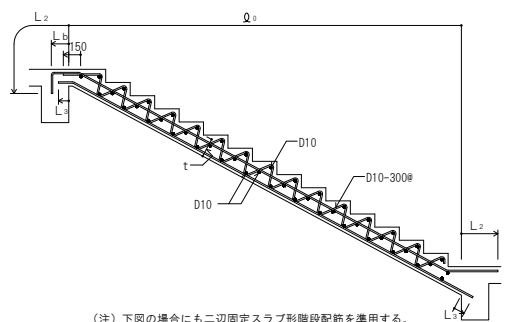


図10.2 二辺固定スラブ形階段配筋(その1)



- (注) 下図の場合にも二辺固定スラブ形階段配筋を準用する。

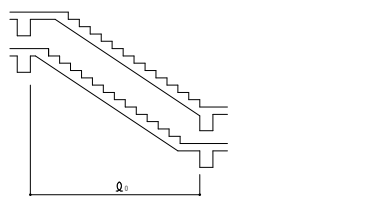


図10.3 二辺固定スラブ形階段配筋(その2)

11.1 梁貫通孔

- (1) 梁貫通孔は、次による。
 (ア) 梁貫通孔補強筋の名称等は、図11.1による。
 (イ) 孔の径は、梁せいの1/3以下とする。
 (ウ) 孔の上下方向の位置は、梁せい中心付近とし、梁中央部下端は梁下端よりD/3 (Dは梁せい)の範囲には設けてはならない。
 (エ) 孔は、柱面から原則として、1.5D以上離す。ただし、基礎梁及び壁付帯梁を除く。
 (オ) 孔が並列する場合の中心間隔は、孔の径の平均値の3倍以上とする。
 (カ) 縦筋及び上下縦筋は、あばら筋の形に配筋する。
 (キ) 補強筋は、主筋の内側とする。また、鉄筋の定着長さは、図11.2による。
 (ク) 孔の径が梁せいの1/10以下、かつ、150mm未満のものは、鉄筋を緩やかに曲げることで、開口部を避けて配筋でき、かつ、設計図に特記された場合において、補強を省略することができる。
 (ケ) 溶接金網の余長は、1格子以上とし、突出しは10mm以上とする。
 (コ) 溶接金網の貫通孔部分には、鉄筋1-13φのリング筋を取り付ける。なお、リング筋は、溶接金網に4箇所以上溶接する。
 (サ) 溶接金網の割付け始点は、横筋ではあばら筋の下側とし、縦筋では貫通孔の中心とする。
 (シ) 他の開孔を設けない範囲は、図11.3による。

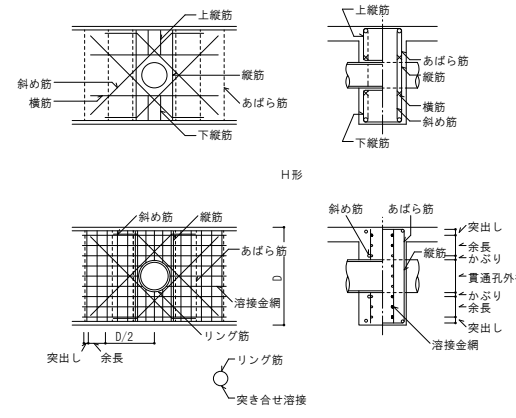


図11.1 梁貫通孔補強筋の名称等

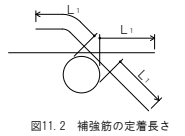


図11.2 補強筋の定着長さ

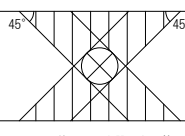


図11.3 他の開孔を設けない範囲

- (2) 梁貫通孔の補強形式は表11.1~表11.2により、配筋種別は設計図による。

表11.1 H形配筋

配筋種別	斜め筋	縦筋	横筋	上下縦筋	配筋図
H1	なし	なし	なし	なし	
H2	2-2-D13	なし	なし	なし	
H3	4-2-D13	2-2-D13	2-2-D13	2-2-D13	
H4	4-2-D16	2-2-D13	2-2-D13	2-2-D13	
H5	4-2-D16	なし	なし	なし	
H6	4-2-D19	4-2-D13	2-2-D13	3-2-D13	
H7	4-2-D22	なし	なし	なし	

- (注) は、一般部分のあばら筋を示す。

表11.2 M形配筋

配筋種別	斜め筋	縦筋	溶接金網	配筋図
MH1	なし	なし	なし	
MH2	2-2-D13	なし	なし	
MH3	2-2-D13	なし	なし	
MH4	4-2-D13	2-2-D13	2-6φ-100#	
MH5	4-2-D16	なし	なし	
MH6	4-2-D16	4-2-D13	2-6φ-100#	
MH7	4-2-D19	なし	なし	

- (注) は、一般部分のあばら筋を示す。

11.2 コンクリートブロック横壁との取合い

- (1) 控壁は、次による。
 (ア) 控壁の配筋は、設計図による。
 (イ) 配筋は、図11.4による。

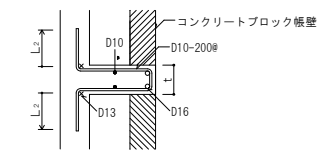


図11.4 控壁の配筋(水平、垂直とも)

- (2) 横壁が土間コンクリート上に設置される場合の補強は、図11.5による。

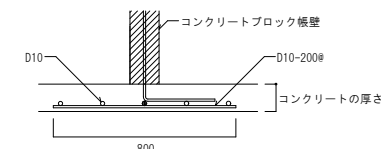


図11.5 壁付き土間コンクリートの補強配筋

11.3 パラベット

パラベットの先端補強筋は図11.6により、コンクリート厚さ及び配筋は構造図による。

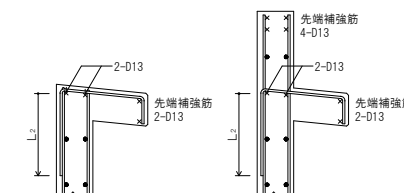


図11.6 パラベットの先端補強筋

12 擁壁

宅地造成等規制区域外での高さ2m以下の擁壁の鉄筋の定着長さは図12により、コンクリートの厚さ及び配筋は構造図による。

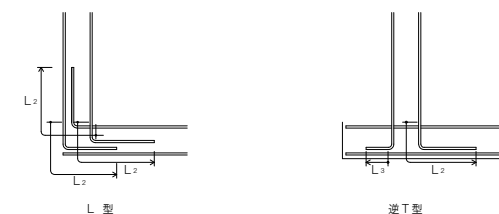


図12 擁壁の鉄筋の定着長さ

構造関係共通図 (鉄骨標準図)

総則

- 適用範囲
 - 本構造関係共通図は鉄骨及び鉄骨鉄筋コンクリート造等における鉄骨の加工、組立の一般的な基準とする。
 - 本構造関係共通図以外については、設計図及び監督員の指示による。
- 用語の定義
 - 設計図とは、建築構造図のうち特記仕様書(構造関係)、構造関係共通図以外の図面をいう。
 - 長さ、厚さの単位は、特記なき限りmmとする。
- 優先順位
 - 設計図書間で配筋方法に相違がある場合の優先順位は以下のとおりとする。
 - 特記仕様書(構造関係)
 - 図面 2-1 設計図
 - 2-2 構造関係共通図(鉄骨標準図)
 - 国土交通省大臣官房官庁官庁部監修「公共建築工事標準仕様書(建築工事編)(令和4年版)」
- 記号等

図面を使用する記号等は、表A~D、図Aを標準とする。

表A 高力ボルト径の記号

区分	径	M12	M16	M20	M22	M24
高力ボルト(F10T, S10T)		●	◆	◆	◆	◆
溶融亜鉛めっき高力ボルト(F8T相当)		○	○	○	○	○

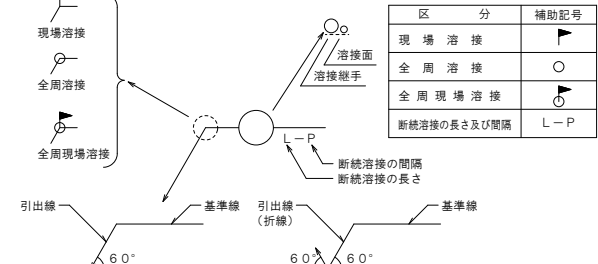
表B 普通ボルト径の記号

区分	径	M12	M16	M20	M22	M24
普通ボルト		○	○	○	○	○

表C 溶接継手及び溶接面の分類別記号

分	類	記号	
		溶接継手	溶接面
溶接継手	完全溶込み溶接	B	T
	隅肉溶接	F	F
	部分溶込み溶接	P	P
	重ねアーク溶接(フレア溶接)	FL	FL
溶接面	片面溶接	1	1
	両面溶接	2	2

表D 溶接の補助記号



図A 溶接記号の記載例

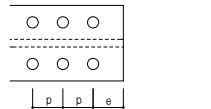
1-1 縁端距離及びボルト間隔

- 縁端距離及びボルト間隔

縁端距離及びボルト間隔は、表1.1による。ただし、引張材の接合部分において、せん断力を受けるボルトが応力方向に3本以上並ばない場合の縁端距離は、構造図による。構造図になければ、ボルト軸径の2.5倍以上とする。また、アンカーボルトの縁端距離は構造図による。

表1.1 縁端距離及びボルト間隔 (単位:mm)

ねじの呼び	縁端距離 e	ボルト間隔 p
M12	40	60
M16		
M20		
M22	45	70
M24		

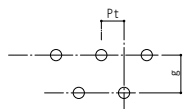


- 千鳥打ちのゲージ及びボルト間隔

千鳥打ちのゲージ及びボルト間隔は、表1.2による。

表1.2 千鳥のゲージ及びボルト間隔 (単位:mm)

ゲージ e	千鳥打ちのボルト間隔 Pt	
	M12, M16, M20, M22	M24
35	50	65
40	45	60
45	40	55
50	35	50
55	25	45
60	-	40



- 形鋼のゲージ及びボルトの最大軸径

形鋼のゲージ及びボルトの最大軸径は、表1.3による。

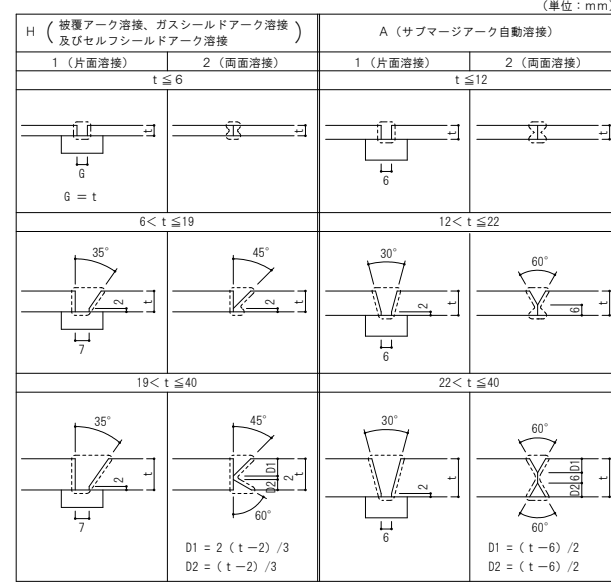
表1.3 形鋼のゲージ及びボルトの最大軸径 (単位:mm)

A又はB	最大軸径		最大軸径		最大軸径	
	B	最大軸径	B	最大軸径	B	最大軸径
45	25	12	100	56	16	50
50	28	16	125	75	16	65
60	35	16	150	90	22	70
65	35	20	175	105	22	75
70	40	20	200	120	24	80
75	40	22	250	150	24	90
80	45	22	300	150	24	100
90	50	24	350	140	24	110
100	55	24	400	140	24	120
125	50	35	24			
130	50	40	24			
150	55	55	24			
175	60	70	24			
200	60	90	24			

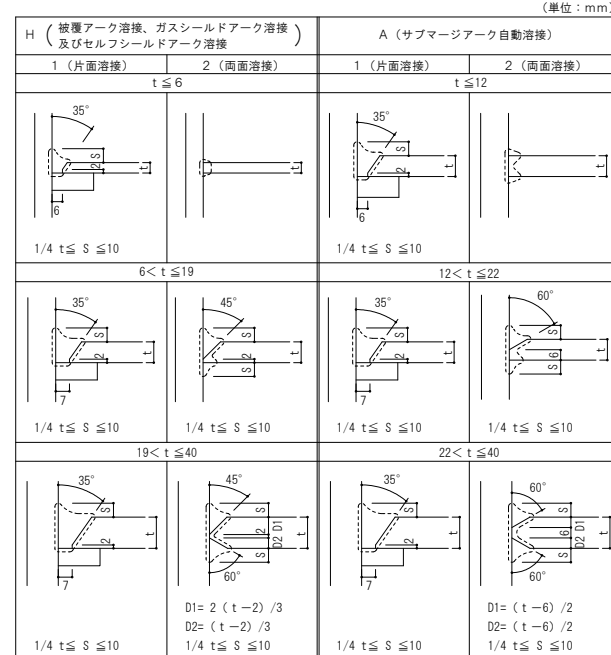
※1 千鳥打ちとした場合

1-2 溶接継手の種類別開先標準

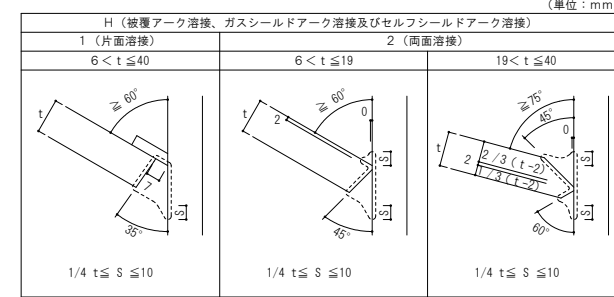
突合わせ継手(B)の開先標準



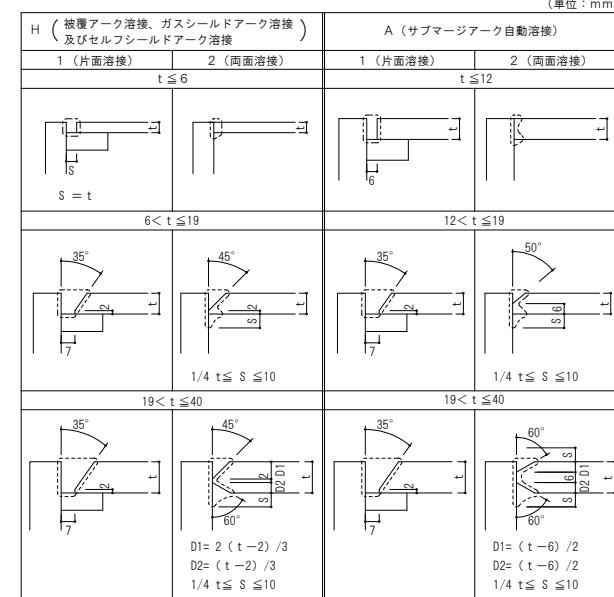
T型継手(T)の開先標準



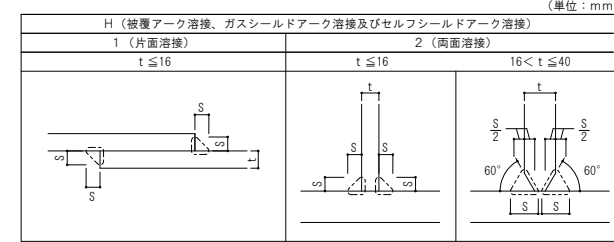
部材が直交しない場合の開先標準



かど継手(L)の開先標準



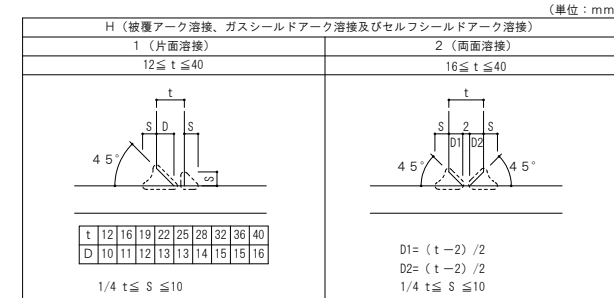
隅肉溶接(F)の開先標準



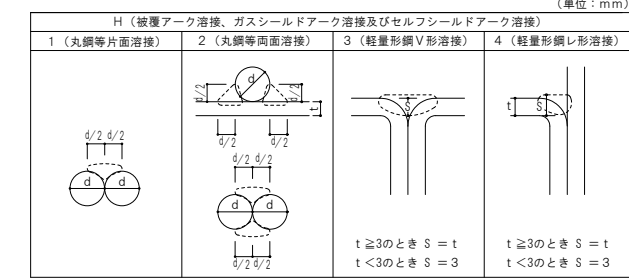
隅肉溶接のサイズ

t	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	19	22	25	28	32	36	40
s	3	4	5	5	6	7	8	8	9	10	10	11	11	12	13	15	17	19	21	24

部分溶込み溶接(P)の開先標準

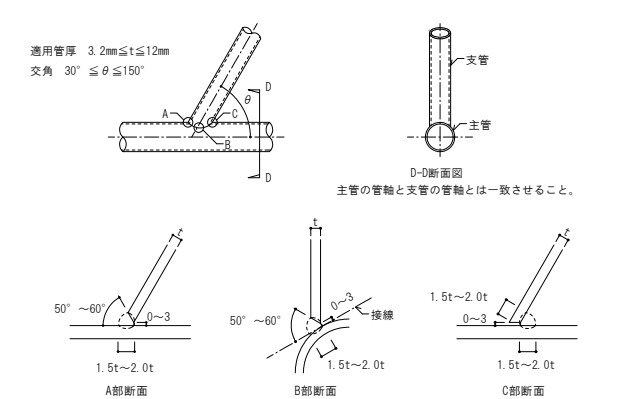


重ねアーク溶接(フレア溶接)(FL)の開先標準



1-3 鋼管分岐継手詳細

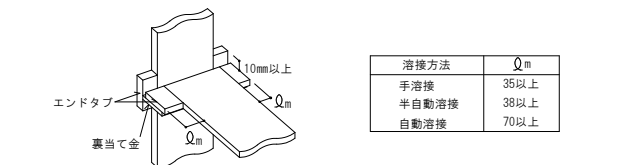
自動機械により開先加工を行う場合はこの限りではない。



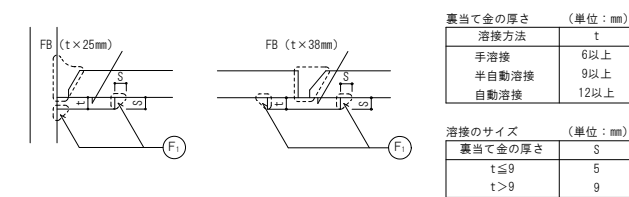
1-4 鉄骨溶接施工

- エンドタブ・裏当て金の鋼材の種別及び引張強さによる区分は、母材と同等とする。
- エンドタブ

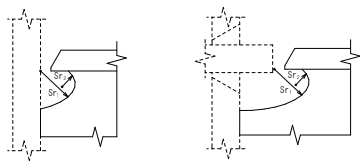
エンドタブの形状は母材と同厚・同開先のものとする。



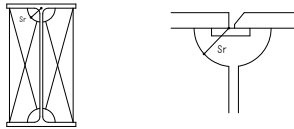
- 裏当て金
 - 裏当て金の組立て溶接は、接合部に影響を与えないように、エンドタブの位置又は梁フランジ幅の1/4の位置に行い、梁フランジ両端から10mm以内の位置には行っていない。
 - 完全溶込み溶接の片面溶接に用いる裏当て金は原則としてフランジの内側に設置する。



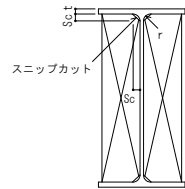
(4) スカラップ
改良型スカラップ
(ア) スカラップ半径Srは35mmとする。Srは10mmとする。
(イ) スカラップ円弧の曲線は、フランジに滑らかに接するように加工し、複合円は滑らかに仕上げ上げる。



従来型スカラップ
スカラップ半径Srは35mmとする。



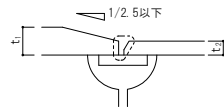
(5) スニップカット
(ア) スニップカット部は溶接により埋めるものとする。



(イ) スニップカットの寸法は、下表による。ただし、既製形鋼のスニップカットについては、 $Sc=r+2$ により求めるものとする。

t	6	9	12	16以上
Sc	10	12	14	15

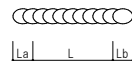
(6) 溶接部分の段差
完全溶込み溶接を行う部分の板厚の差による段差が10mmを超える場合、又は低応力高サイクル疲労を受ける場合



1-5 重ねアーク溶接（フレア溶接）を行う場合の溶接長さ

鉄筋又は軽量形鋼に重ねアーク溶接（フレア溶接）を行う場合の溶接長さ（L）は、ビードの始点（La）及びクレーター（Lb）を除いた部分の長さとする。

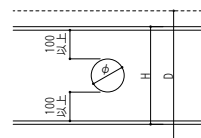
L：片面フレア溶接の場合 10d
両面フレア溶接の場合 5d
La及びLbは1d（軽量形鋼については1S）以上
d：異形鉄筋の呼び名に用いた数値
S：溶接のサイズ



1-6 梁貫通孔補強

(1) 鉄骨造及び鉄骨鉄筋コンクリート造の鉄骨梁ウェブ部に貫通孔を設ける場合は、次による。
(ア) 貫通孔の内径寸法は、鉄骨せいりの1/2以下かつ鉄筋コンクリート梁せいの1/3以下とする。
(イ) 貫通孔間隔は、両側の貫通孔径の平均値の、鉄骨造で2倍以上、鉄骨鉄筋コンクリート造で3倍以上確保する。

梁貫通孔の位置の限度（単位：mm）

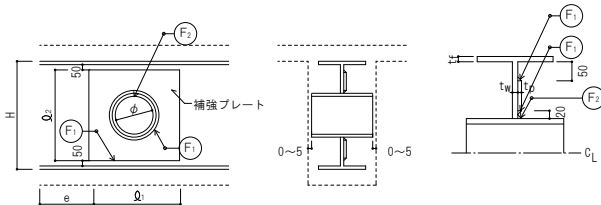


H：鉄骨せい
D：はりせい
phi：貫通孔内径寸法
($\phi \leq H/2$ かつ $\phi \leq D/3$)

(2) 貫通孔の補強方法は、構造図による。
補強プレート法及び補強トラス法の溶接等は、以下による。

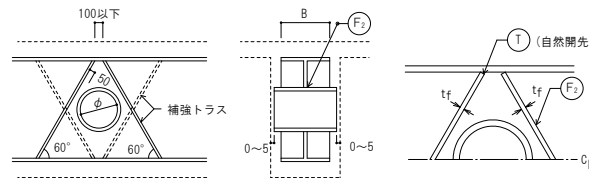
補強プレート法

(ア) 補強プレートが16mm以上となる場合は、必要な長さの1/2以上の補強プレートをウェブ両面から溶接する。
(イ) 補強プレートは丸型としても良い。上下フランジとのあき50mmについては施工性を考慮して小さくすることもできる。

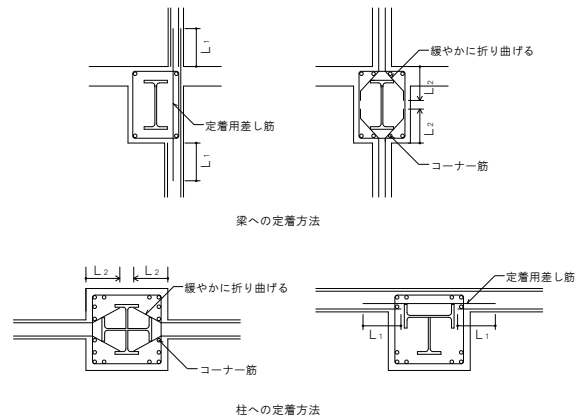


Qは3φまたはQ₂のうち小さい方とする。（e ≧ Hとする）
e：材端と補強プレートの間隔

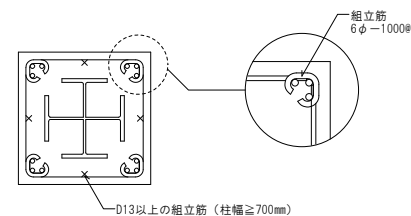
補強トラス法
スリーブの取付けは、全周隅内溶接とする。



1-7 壁筋の周辺部材への定着

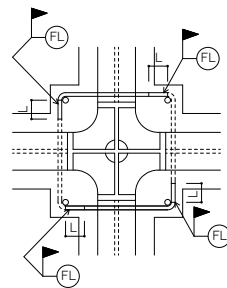


1-8 柱組立筋



1-9 仕口部内の帯筋の加工及び組立

片面溶接の溶接長さ（L）は、鉄筋の呼び名の数値の10倍以上とする。ただし、溶接によらない場合は135°曲げフックとする。

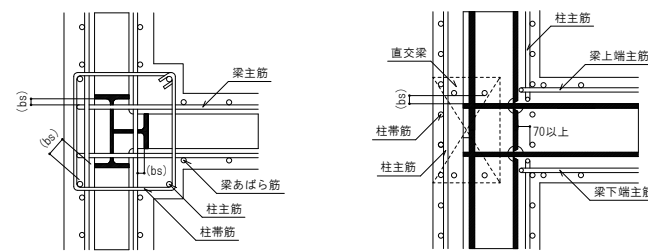


1-10 鉄筋貫通孔の径及び位置

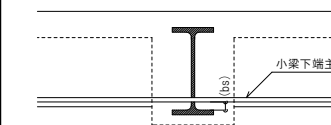
(a) 鉄筋貫通孔の径
鉄筋の貫通孔径の最大値は、下表による。

鉄筋の呼び名	（単位：mm）							
	D10	D13	D16	D19	D22	D25	D29	D32
鉄筋貫通孔の径	21	24	28	31	35	38	43	46

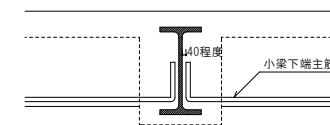
(b) 鉄筋貫通孔の位置
鉄骨フランジには、鉄筋貫通孔を設けないものとする。



小梁下端主筋が貫通する場合



小梁下端主筋が貫通しない場合（単位：mm）



(bs)：主筋と平行する鉄骨とのあき

1-11 広幅平鋼の取り扱いについて

(a) BH材のフランジ及びフランジに使用する外側スプライスプレートは、PL表記であってもFB又はPLとする。
(b) BH材のフランジ及びフランジに使用する外側スプライスプレートの適用幅及び厚さは下表による。

幅	厚さ										
	6	9	12	16	19	22	25	28	32	36	40
100	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
125	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
150	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
175	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
200	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
250	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
300	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
350	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
400	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
450											
500											

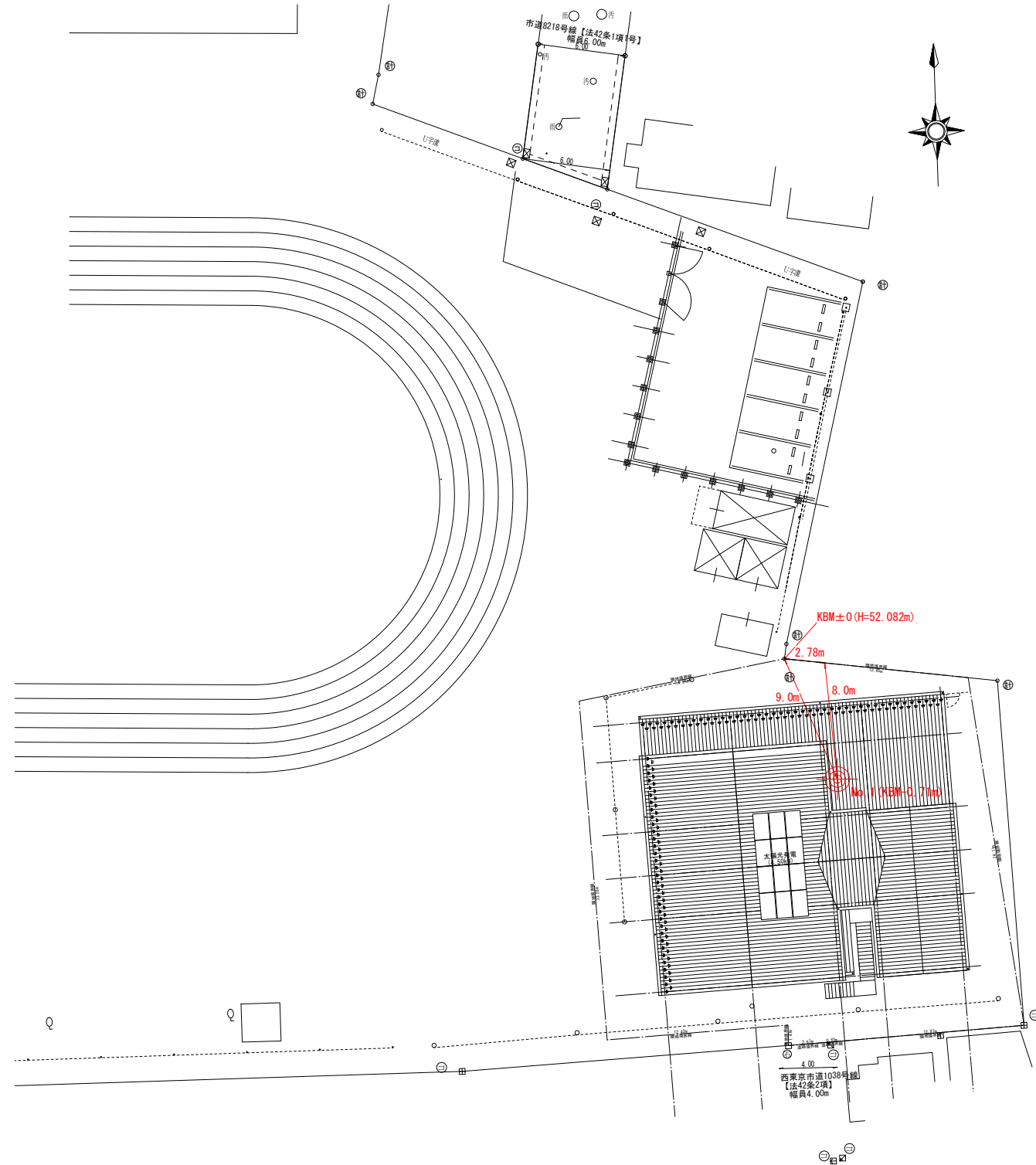
1-12 普通ボルト接合

もや、鋼縁類の取付け用ボルトを普通ボルト接合とする場合は、二重ナットとする。

1-13 その他

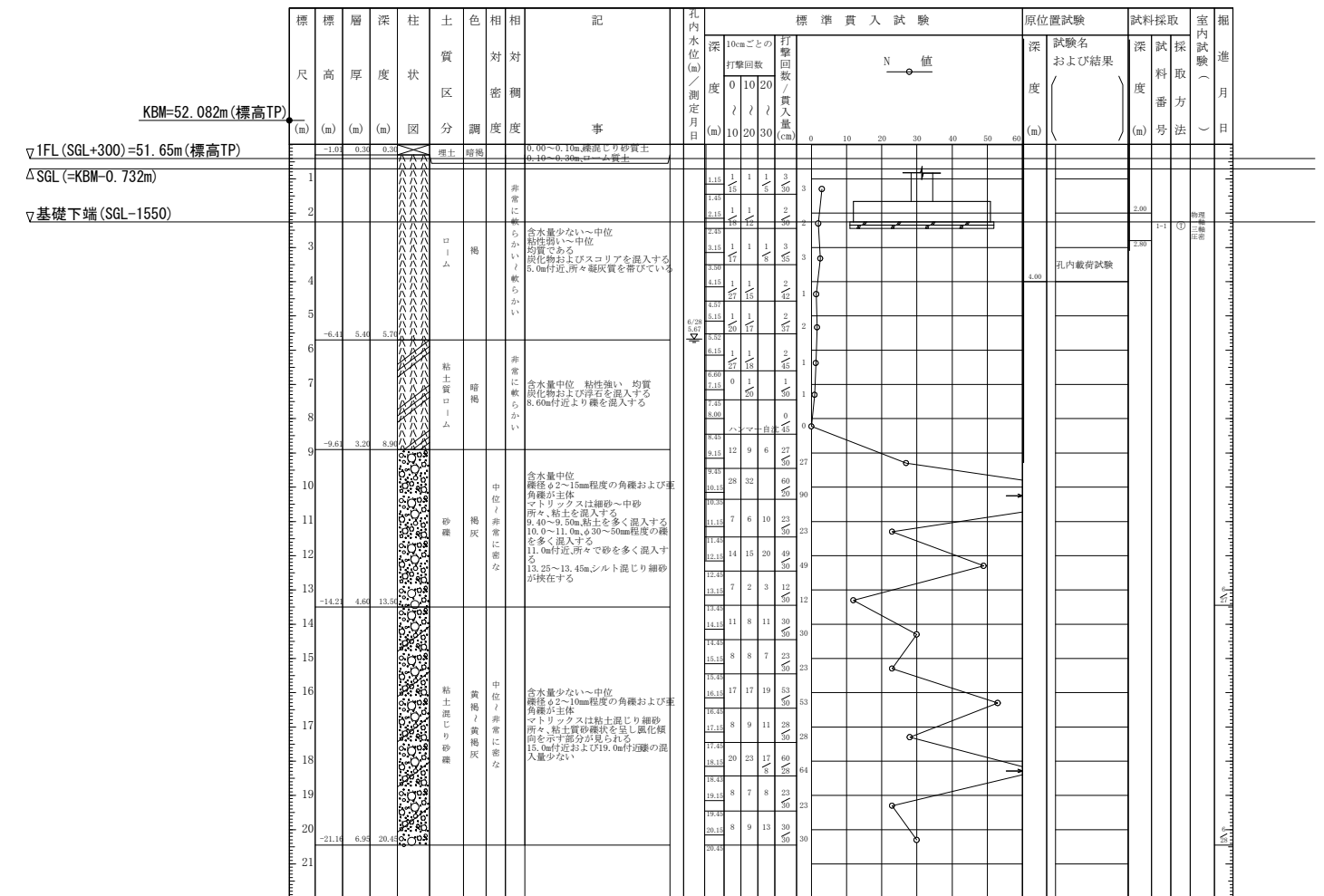
(a) フィラープレートの材質
フィラープレートを使用する場合、材質はSS400とする。

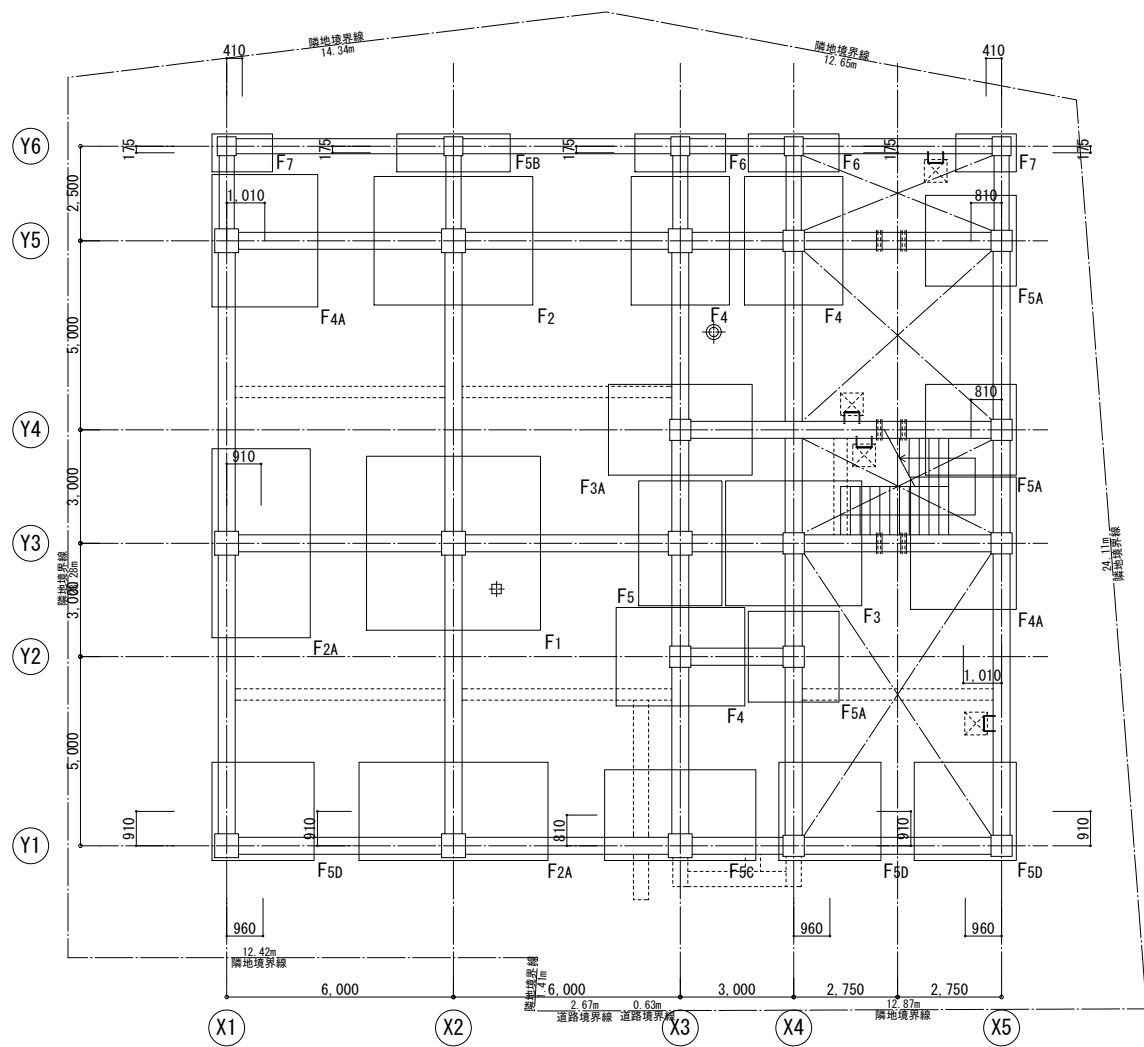
No. 1 ボーリング柱状図



地質調査位置図 S=1:200

ボーリング名	No. 1		調査位置	埼玉県新座市野寺五丁目1番24号 野寺小学校グラウンド		北緯	
発注機関	新座市		調査期間	令和 5年 6月 26日 ~ 5年 6月 29日		東経	
調査業者名	株式会社 桂設計 埼玉事務所 電話 (048-822-9756)		主任技師	現場代理人		ボーリング責任者	山田 秀悟
孔口標高	KBM -0.71m	角 上 180° 下 0°	方 北 0° 西 180°	地盤勾配 鉛直 90°	使用機種 試験機 エンジン	コア 鑑定者	ハンマー 落下用具 半自動落下装置
総掘進長	20.45m				NFD-9	ポンプ V-6	





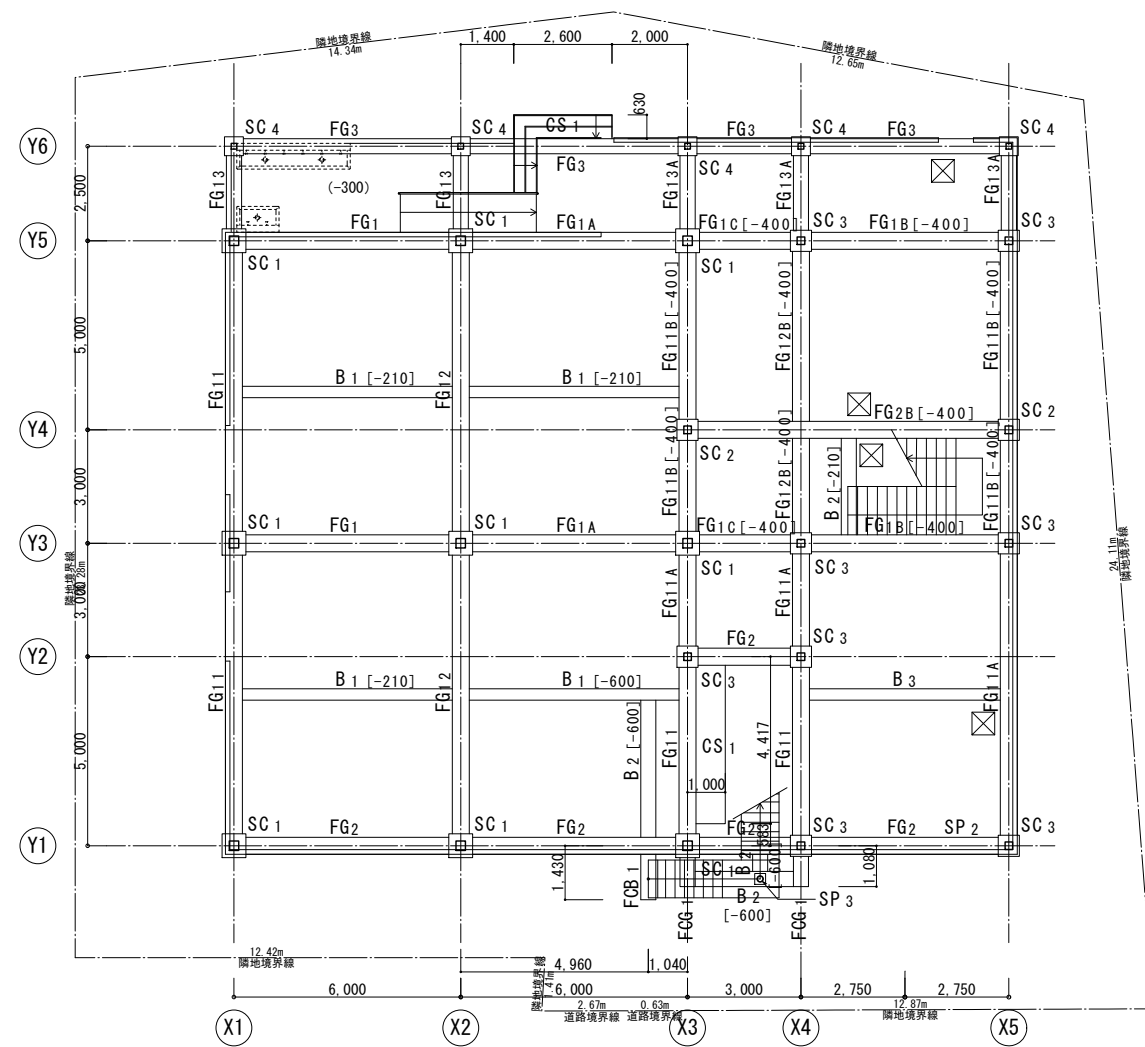
基礎伏図 S=1:100

特記事項

1. IFL=51.65m(標高TP) GL=IFL-300
 2. [] 内の数字は、IFLからのビット天端レベルを示す。
 3. () 内の数字は、捨てコンクリートレベルを示す。
 4. ≡ 通気孔75φ
 5. ≡≡ 通気孔150/2φ
- ※人通り、通気孔、通水孔及び設備配管については、S-06 構造配筋標準図(4) 11.1又はS-09 金網通気管仕様(参考図)をもとに位置(レベル、間隔)等を決定し監理者の承認を受けること。
6. [] 枠内 600x600xH600 (捨てコンクリート部) 防水モルタル
 7. [] 上部床下点検口 600x600 (防臭・防水)
 8. [] SUSタラップφ19
*全ての床下点検口に設置
 9. [] 印は捨てコンクリート勾配を示す。(ふかし勾配は不可)
 10. [] 印はポーリング位置を示す。
 11. [] 印は試験組(FL-2040)・平板載荷試験(1箇所)の位置を示す。
- 平板載荷試験は、長期設計支持力 90 kN/m^2 、確認地耐力 100 kN/m^2 (90×1.1)を確保すること。最大載荷 2.21 (載荷直径 300ϕ)とする。
試験方法は、地盤工学会の地盤の平板載荷試験方法(JIS 1521)による。

特記なき限り下記による

1. 基礎底レベルは、IFL-1850とする。
2. 基礎下は、砕石100、捨てコンクリートは砕石60、捨てコンクリートは砕石50とする。



1階床伏図 S=1:100

特記事項

1. IFL=51.65m(標高TP) GL=IFL-300
2. [] 内の数字は、FLからの梁天端高さを示す。
3. () 内の数字は、FLからのスラブ天端高さを示す。
4. [] 上部床下点検口 600x600 (防臭・防水)
5. 基礎巾木はフカンを設け、伸縮目地を設けること。

特記なき限り下記による

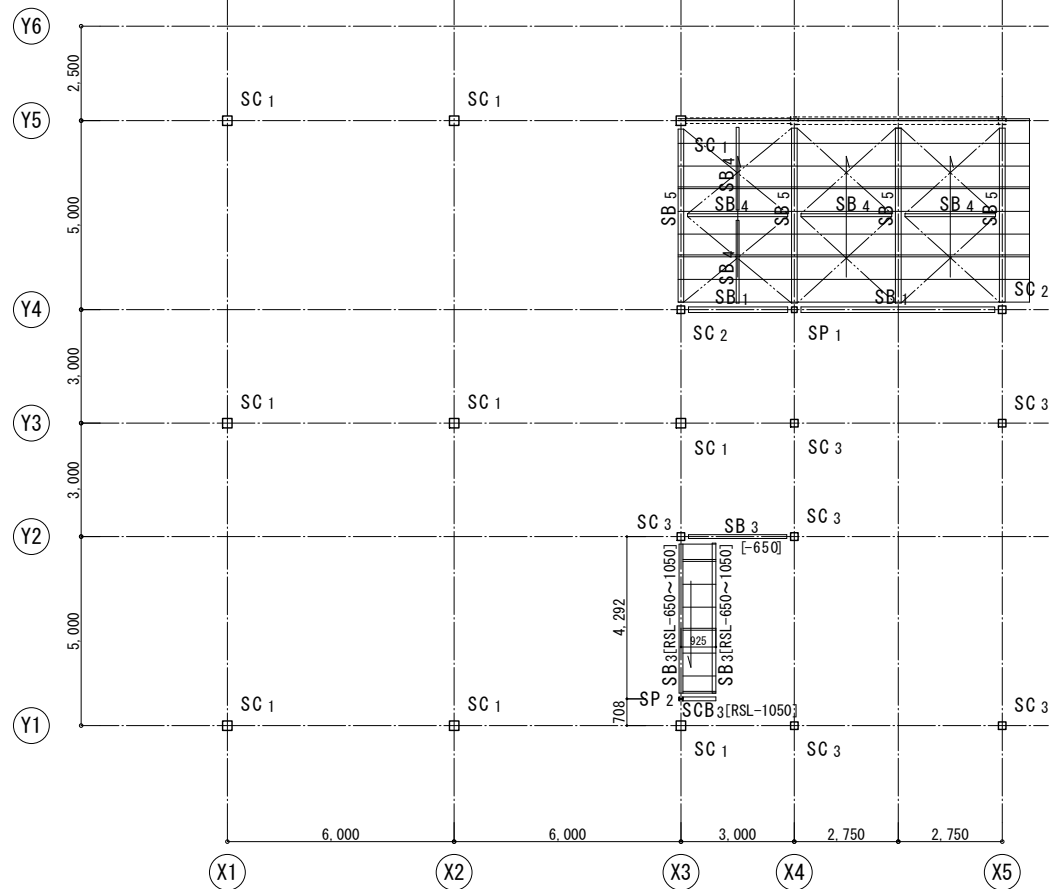
1. 基礎梁天端レベルは、IFL-600とする。
2. 小梁・スラブ天端レベルはFL-30とする。
3. 立上りR0壁はW12 H=100とする。
4. IFスラブはS18とする。

工事名 野寺放課後児童保育室建設工事

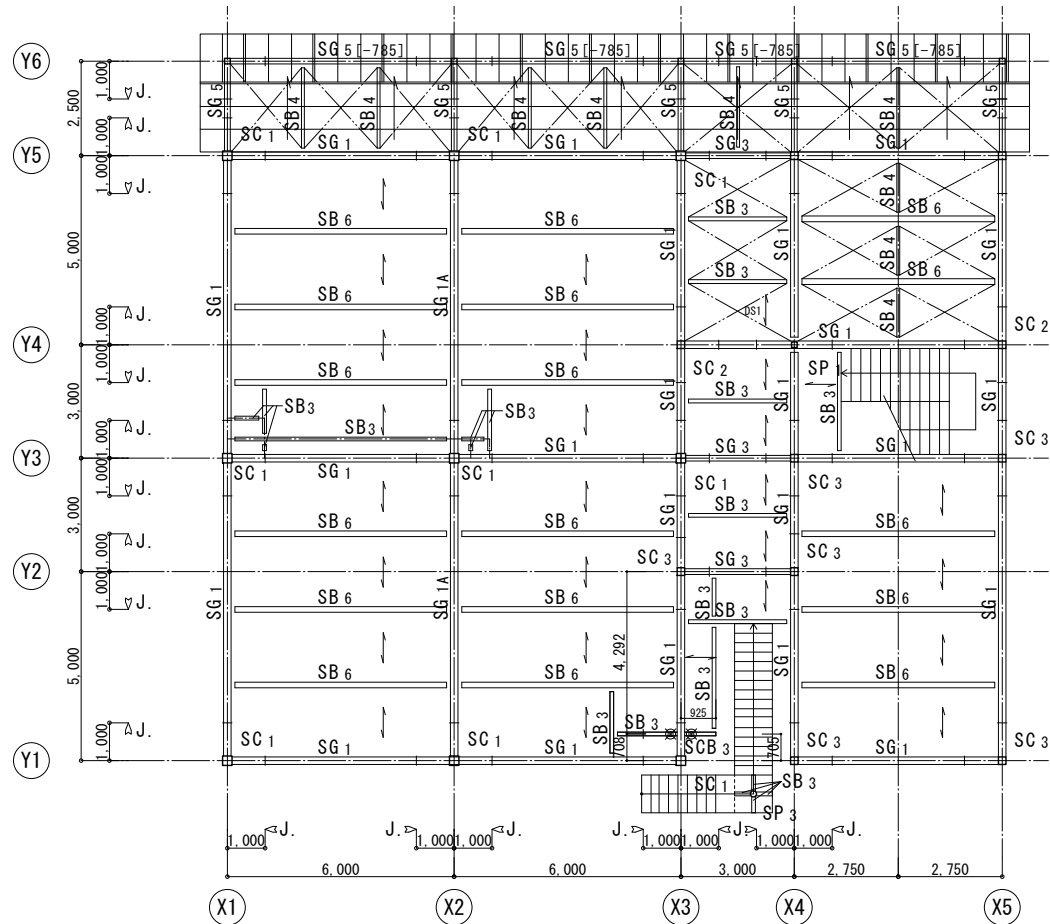
図面名 基礎伏図・1階床伏図

縮尺 A1:1:100
A3:1:200

図面番号 S-14



2階+1.250床伏図 S=1:100



2階床伏図 S=1:100

特記事項

- 2FL+1.250=1FL+5.050
- [] 内の数字は、FLからの梁天端高さを示す。
- () 内の数字は、FLからのスラブ天端高さを示す。
- 印はDS1デッキプレートの向きを示す。
- 印は屋根勾配の向きを示す。
- 印は水平（屋根）プレースLVI6を示す。
- 印は母屋C-100x50x20x3.2-606を示す。
- 印は母屋20-100x50x20x3.2-1820を示す。

特記なき限り下記による

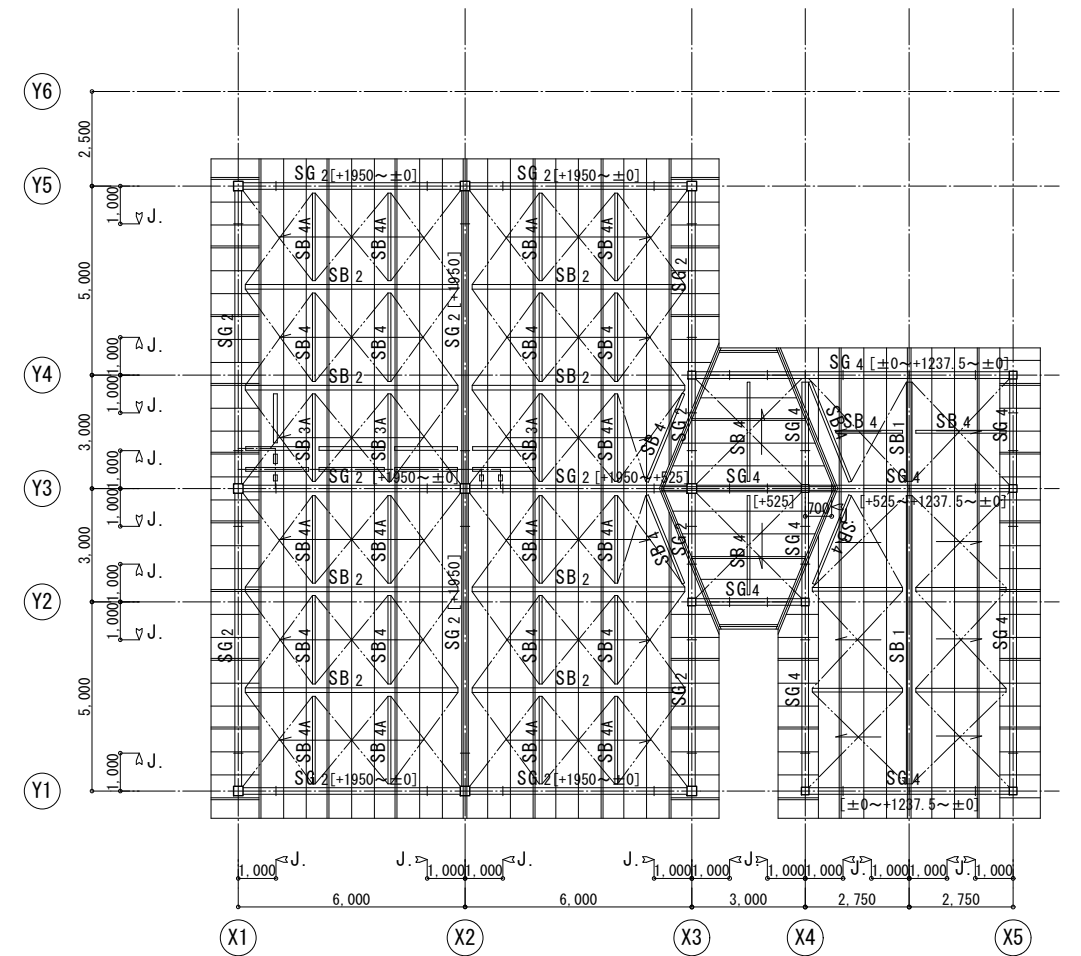
-

特記事項

- 2FL=1FL+3.800
- [] 内の数字は、FLからの梁天端高さを示す。
- () 内の数字は、FLからのスラブ天端高さを示す。
- 印はDS1デッキプレートの向きを示す。
- 印は屋根勾配の向きを示す。
- 印は水平（屋根）プレースLVI6を示す。
- 印は剛接合を示す。
- 印は母屋C-100x50x20x3.2-606を示す。
- 印は母屋20-100x50x20x3.2-1820を示す。

特記なき限り下記による

- 2F梁天端レベルは、FL-160とする。
- 2Fスラブ天端レベルは、FL-30とする。
- 2FスラブはDS1とする。



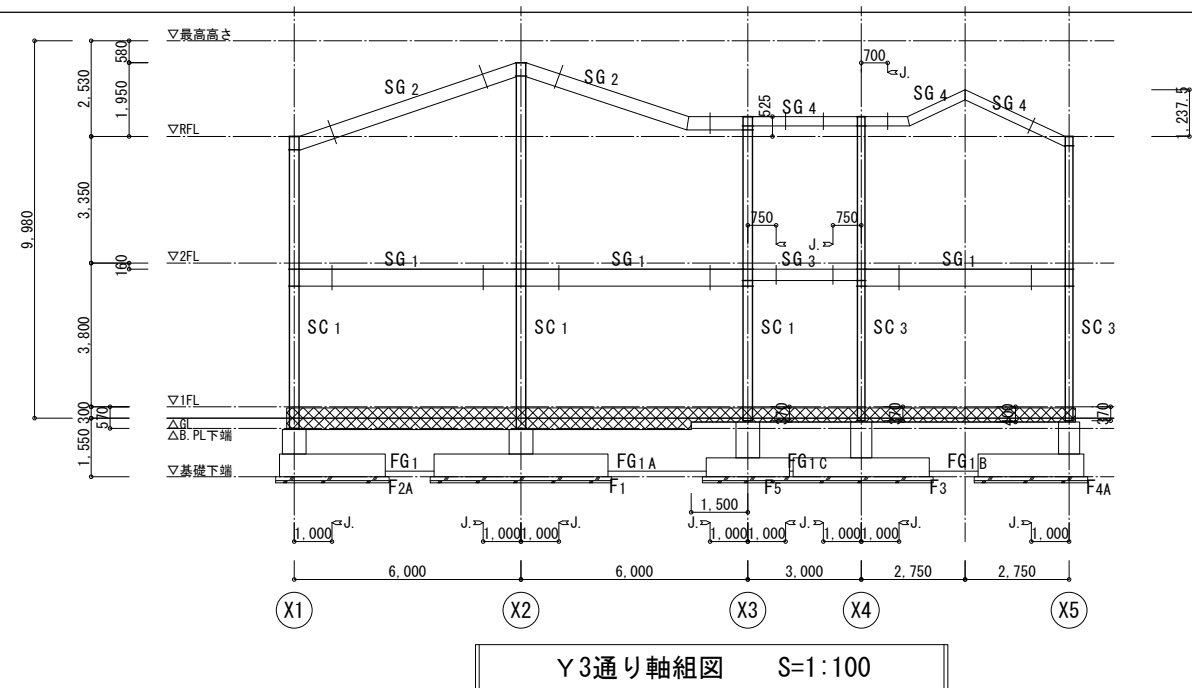
屋根伏図 S=1:100

特記事項

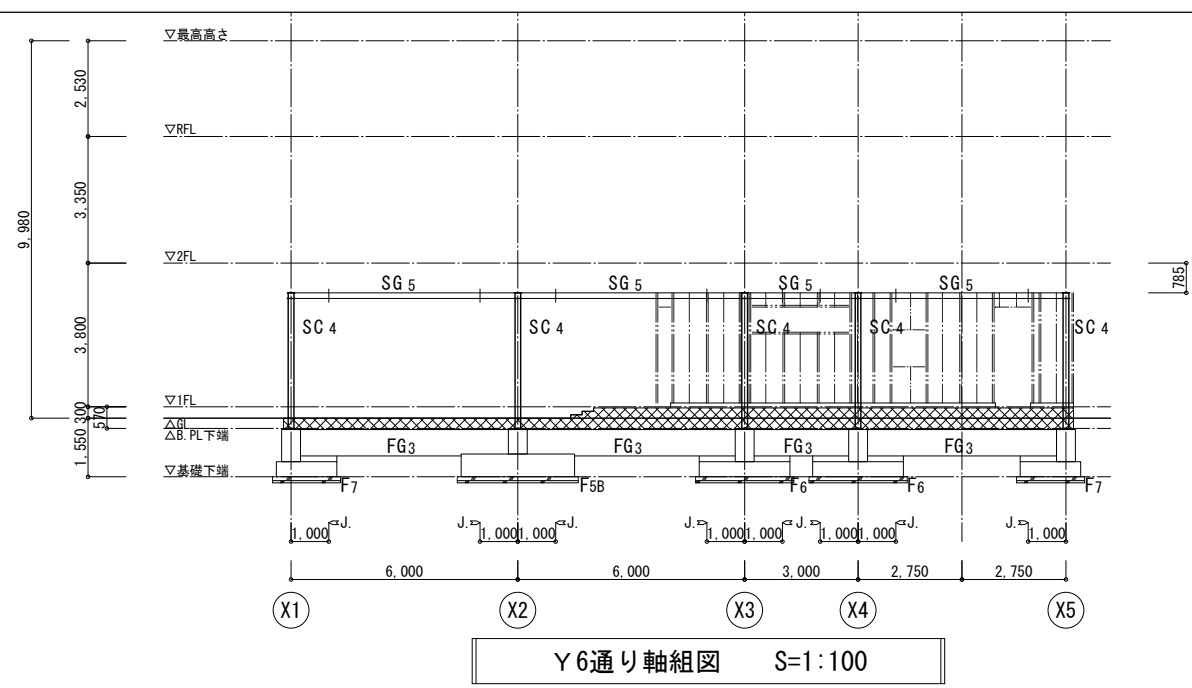
- RFL=1FL+7.150
- [] 内の数字は、FLからの梁天端高さを示す。
- 印は屋根勾配の向きを示す。
- 印は水平（屋根）プレースLVI6を示す。
- 印は母屋C-100x50x20x3.2-606を示す。
- 印は母屋20-100x50x20x3.2-1820を示す。

特記なき限り下記による

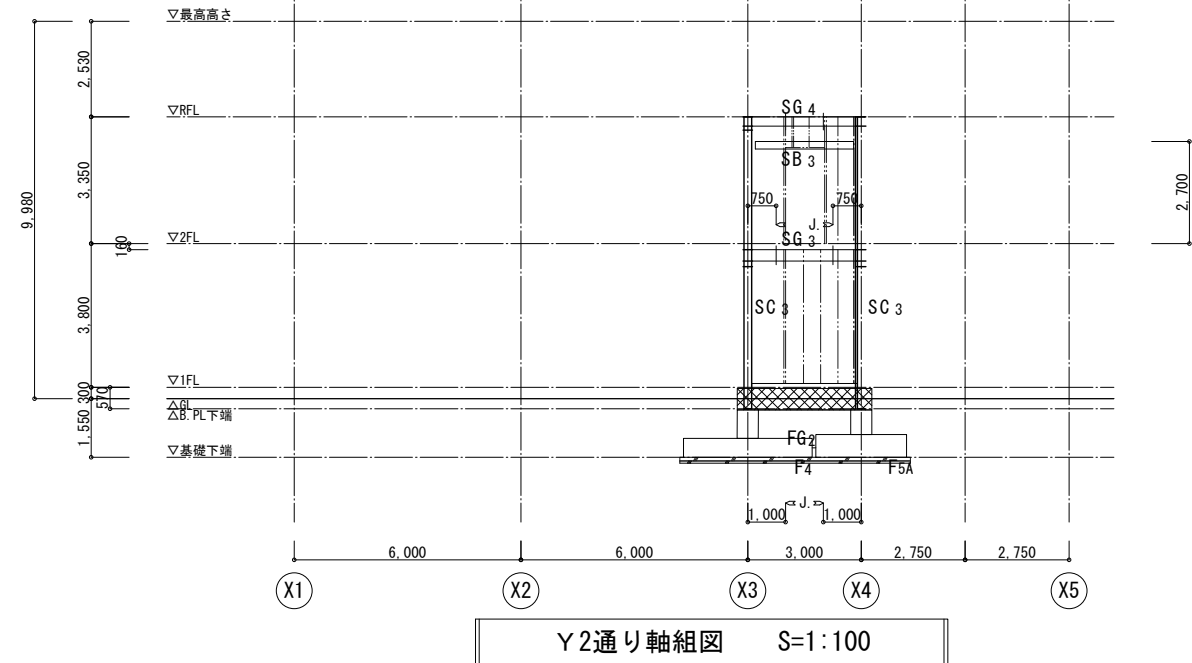
- RFL梁天端レベルは、FL±0とする。
- 鉄骨小梁はSB3とする。



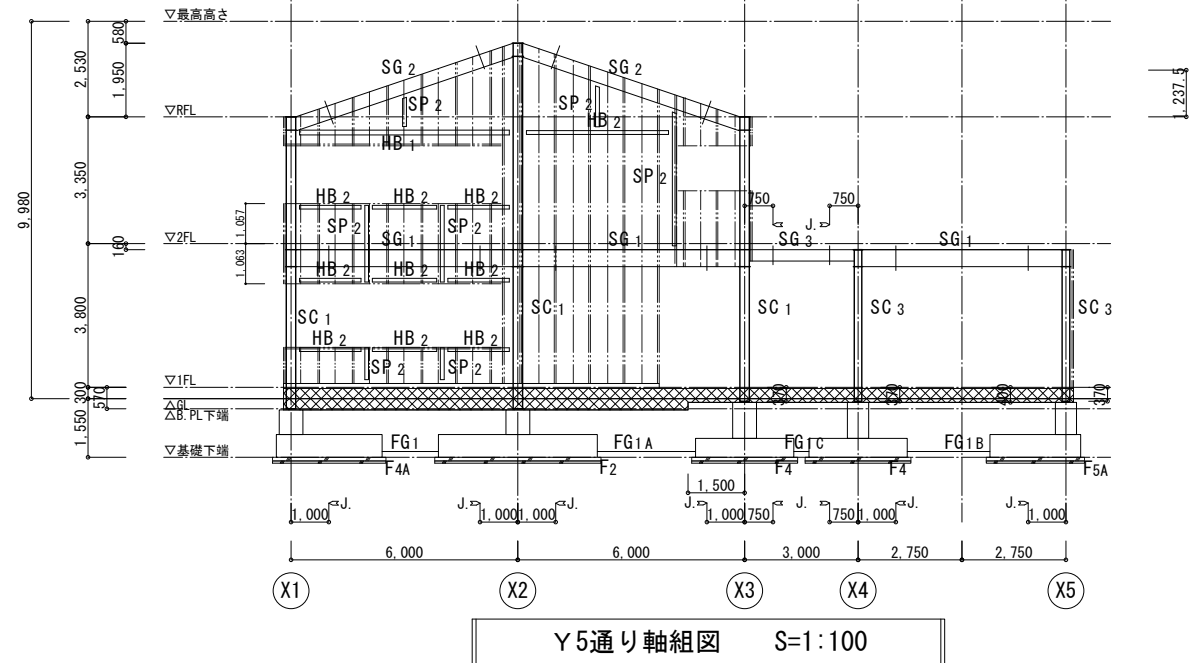
Y3通り軸組図 S=1:100



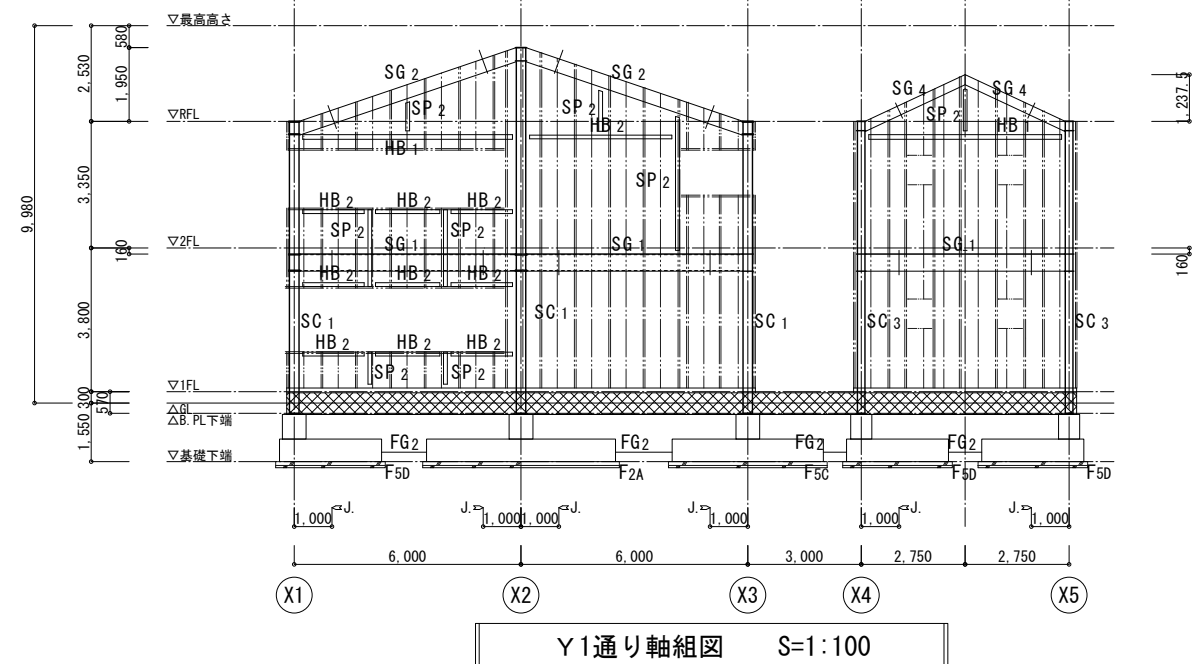
Y6通り軸組図 S=1:100



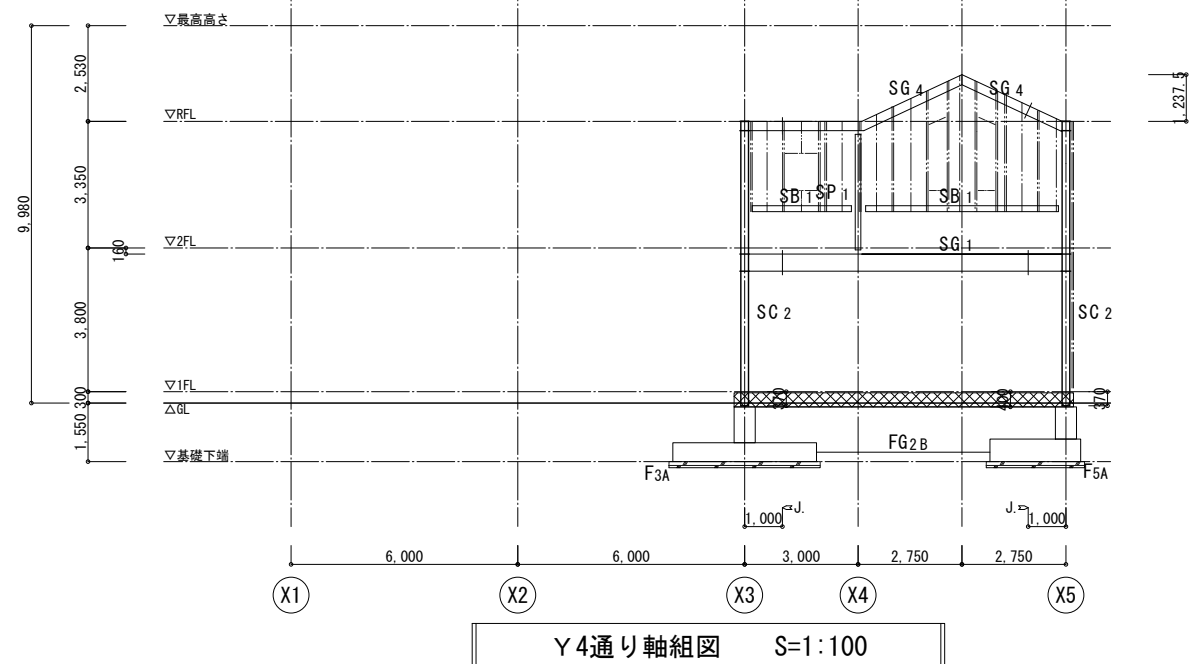
Y2通り軸組図 S=1:100



Y5通り軸組図 S=1:100

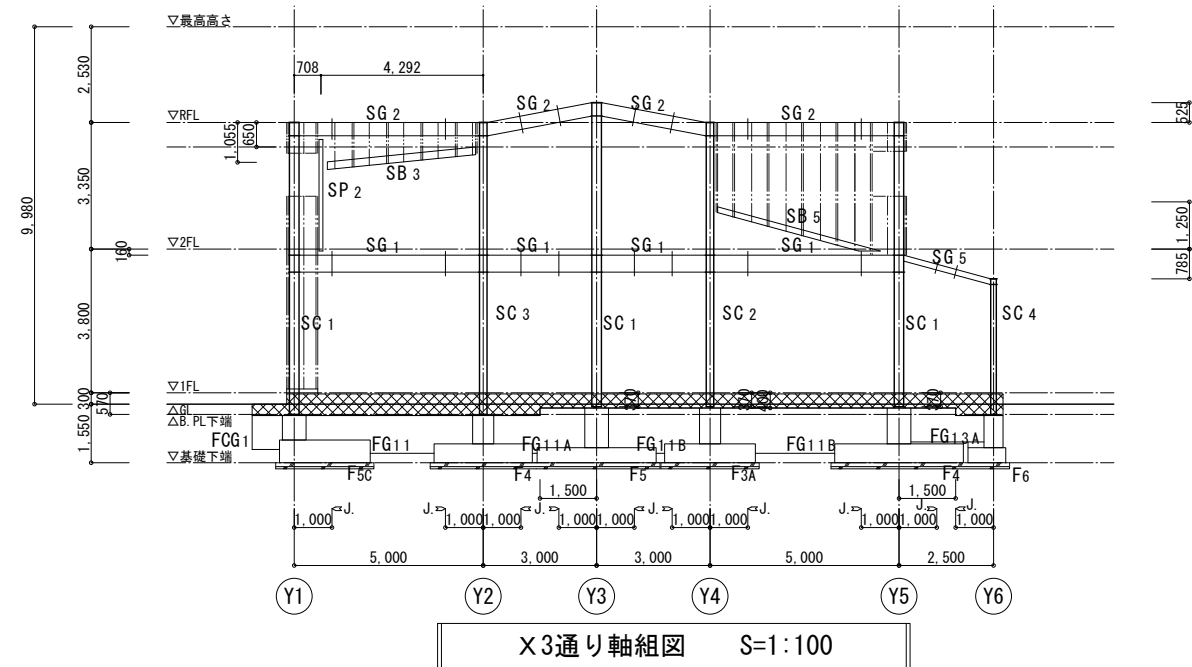


Y1通り軸組図 S=1:100

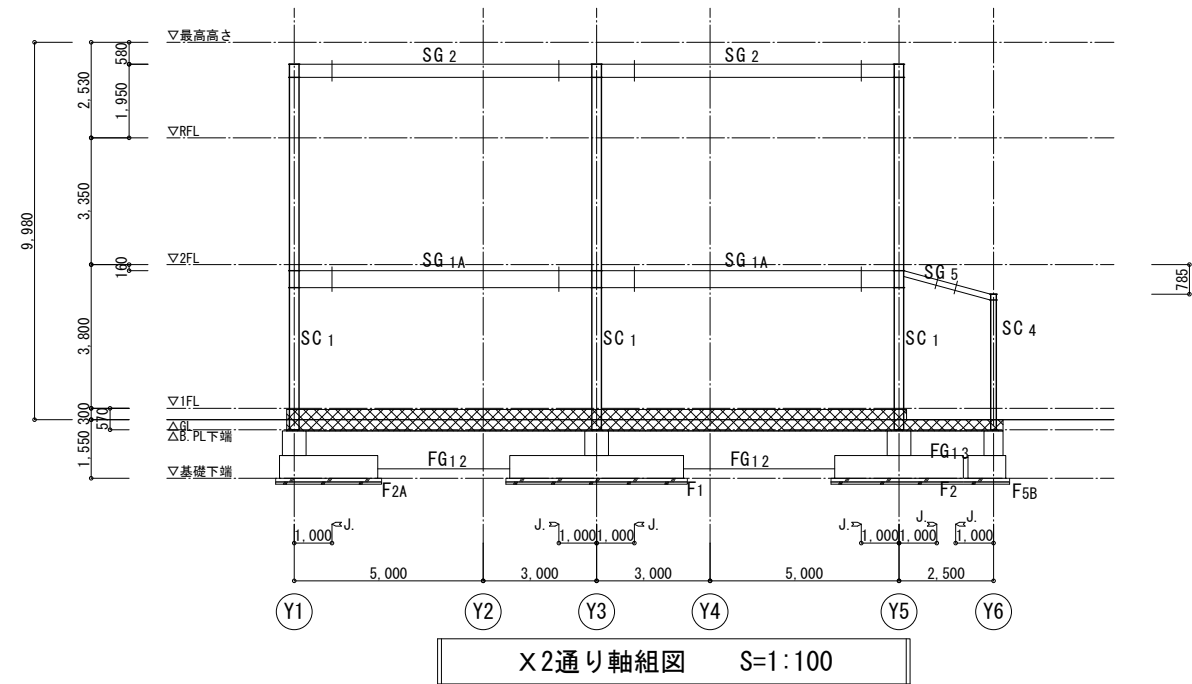


Y4通り軸組図 S=1:100

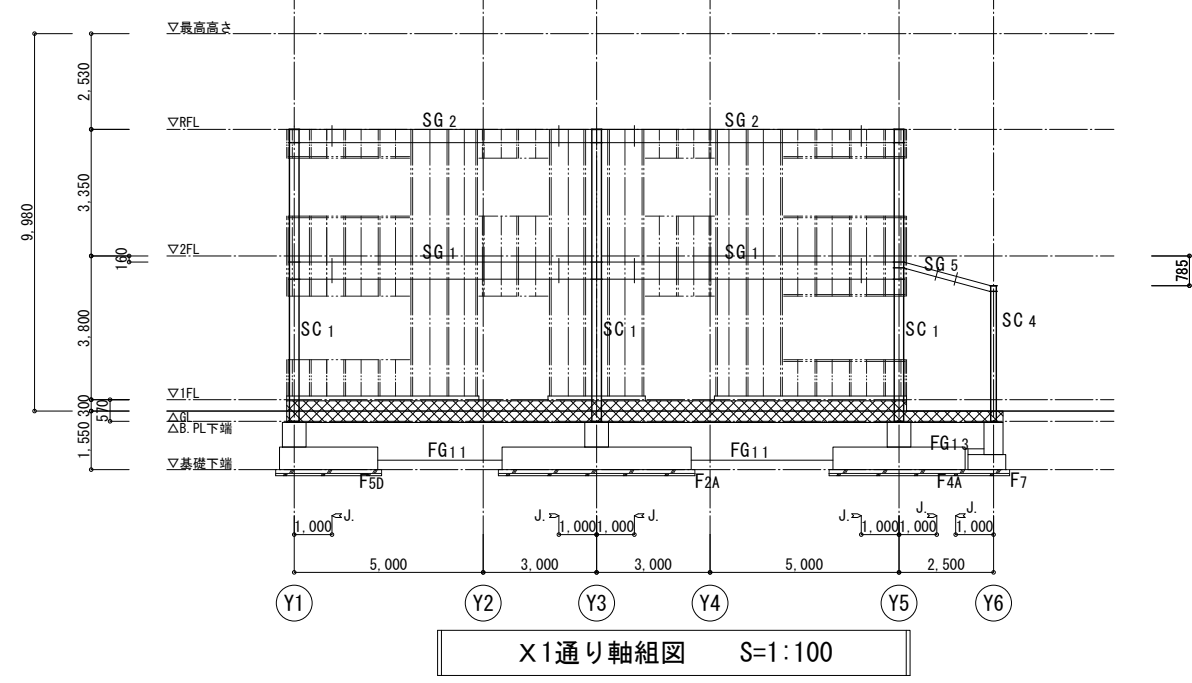
特記事項
 1. は柱梁のふかし部分を示す。
 2. は鋼線C-75x45x15x2.3-455#
 2C-75x45x15x2.3-910#を示す。
 特記なき限り下記による
 1. 基礎梁天端レベルはFL-600とする。
 2. スラブ天端レベルはFL-30とする。



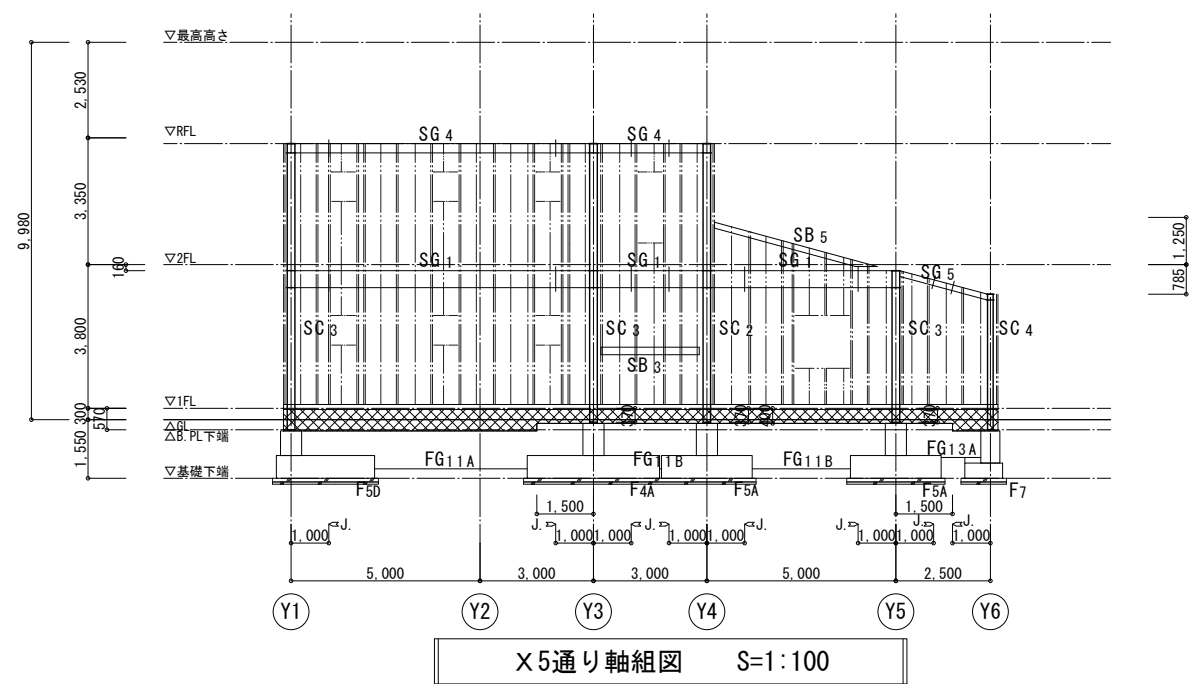
X3通り軸組図 S=1:100



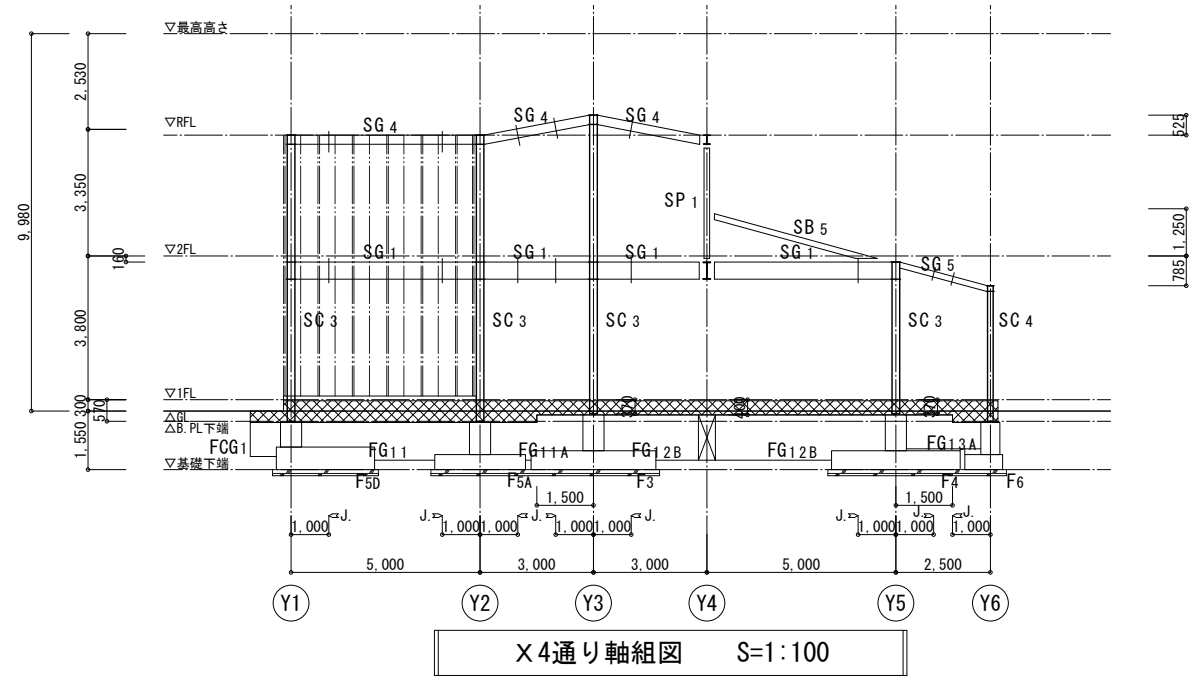
X2通り軸組図 S=1:100



X1通り軸組図 S=1:100



X5通り軸組図 S=1:100

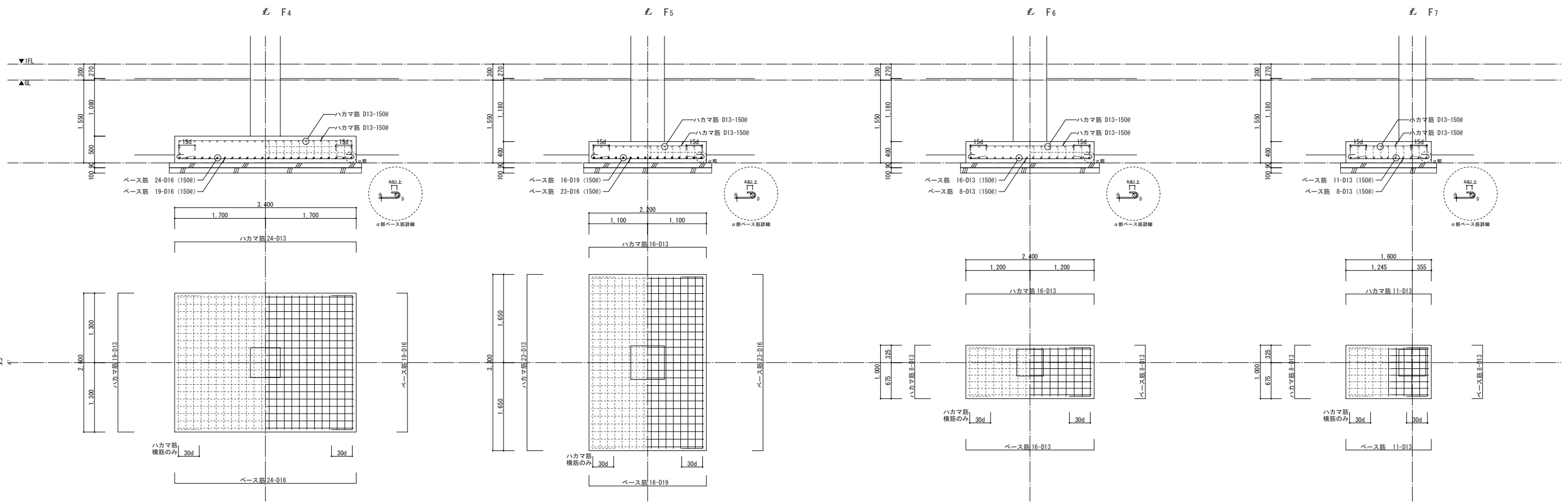
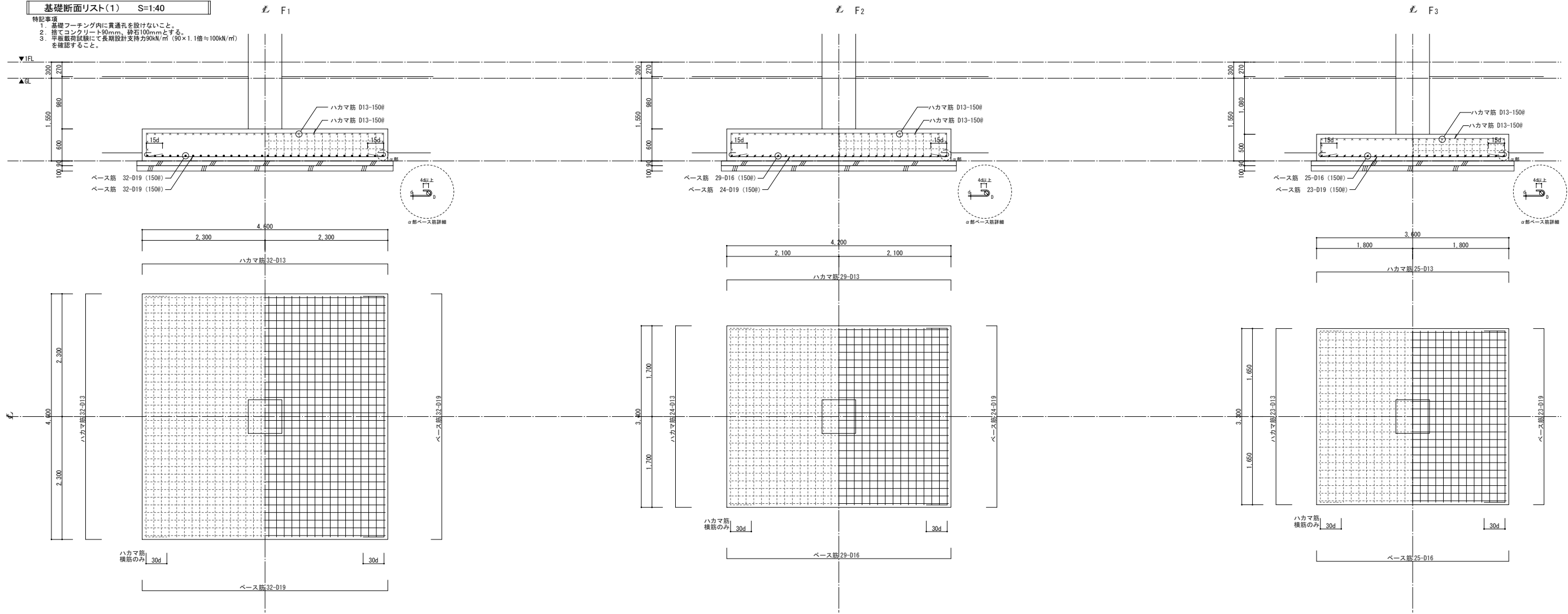


X4通り軸組図 S=1:100

特記事項
 1. 柱梁のふかし部分を示す。
 2. は鋼線C-75x45x15x2.3-45#
 2C-75x45x15x2.3-910#を示す。
 特記なき限り下記による
 1. 基礎梁天端レベルはFL-600とする。
 2. スラブ天端レベルはFL-30とする。

基礎断面リスト(1) S=1:40

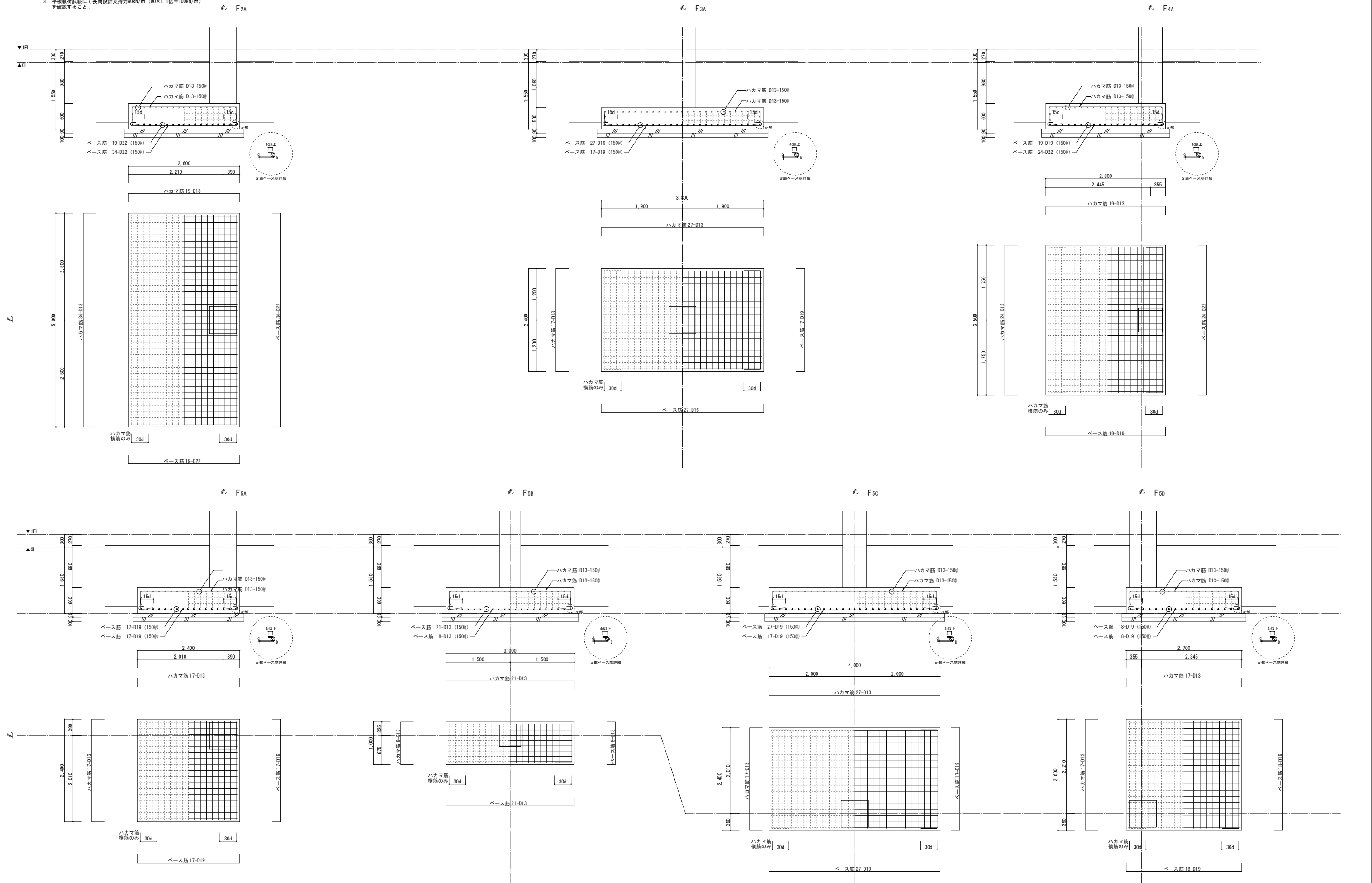
- 特記事項
 1. 基礎フーチング内に貫通孔を設けないこと。
 2. 捨てコンクリート90mm、砕石100mmとする。
 3. 平面断面試験にて長期設計支持力90kN/m² (90×1.1倍=100kN/m²)
 を確認すること。



工事名	野寺放課後児童保育室建設工事	縮尺	A1:1:40 A3:1:80	図面番号	S-18
図面名	基礎断面リスト(1)				

基礎断面リスト(2) S=1:40

- 特記事項
 1. 基礎フーチング内に貫通孔を設けないこと。
 2. 捨てコンクリート90mm、砕石100mmとする。
 3. 平面載荷試験にて長期設計支持力90kN/m²(90×1.1倍=100kN/m²)を確認すること。



工事名	野寺放課後児童保育室建設工事		
図面名	基礎断面リスト(2)	縮尺	A1:1:40 A3:1:80
図面番号	S-19		

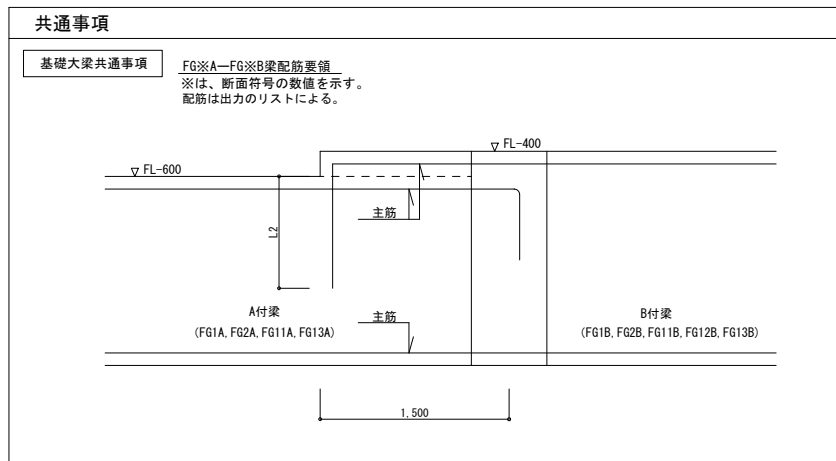
基礎梁断面リスト S=1:30

特記事項
 1. 左右の主筋については、可能な限り通し配筋とすること。
 2. 巾止め筋: D10-1,000
 3. 梁上打増し高さは、スラブ天端に準ずる。

符号	FG1		FG1A		FG1B		FG1C		FG2		FG2B	
	位置	X1端・中央	他端	他端・中央	X3端 (1500範囲)	両端	中央	両端	中央	両端	中央	
▽ 1. FL (G1.65)	断面図											
B×D	450 x 1,100		450 x 1,100		450 x 1,300		450 x 1,300		450 x 1,000		450 x 1,200	
主筋	上端筋	8 - D25	5 - D25	5 - D25	5 - D25	8 - D25	8 - D25	5 - D25	5 - D25	6 - D25	6 - D25	6 - D25
	下端筋	8 - D25	5 - D25	5 - D25	5 - D25	8 - D25	8 - D25	5 - D25	5 - D25	6 - D25	6 - D25	6 - D25
スターラップ	□ - D13 - 150#		□ - D13 - 150#		□ - D13 - 150#		□ - D13 - 150#		□ - D13 - 150#		□ - D13 - 150#	
腹筋	4 - D13		4 - D13		6 - D13		6 - D13		4 - D13		6 - D13	
備考												

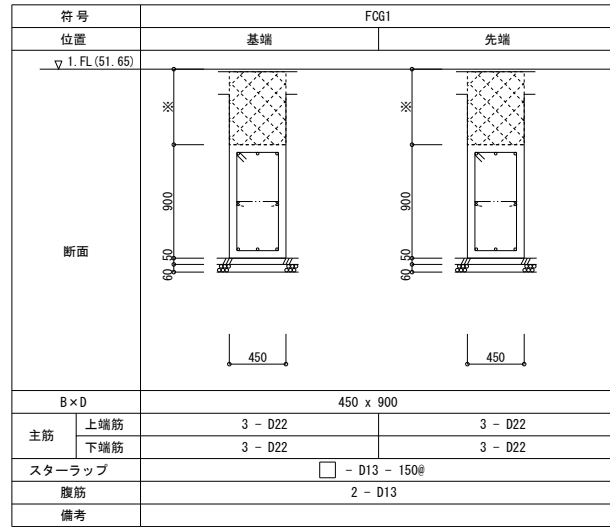
符号	FG3		FG11		FG11A		FG11B		FG12		FG12B	
	位置	両端	中央	両端	中央	他端・中央	Y3端 (1500範囲)	両端	中央	両端	中央	
▽ 1. FL (G1.65)	断面図											
B×D	400 x 700		450 x 1,000		450 x 1,000		450 x 1,200		450 x 1,000		450 x 1,200	
主筋	上端筋	5 - D25	5 - D25	8 - D25	8 - D25	6 - D25	6 - D25	6 - D25	6 - D25	8 - D25	8 - D25	8 - D25
	下端筋	5 - D25	5 - D25	8 - D25	8 - D25	6 - D25	6 - D25	6 - D25	6 - D25	6 - D25	6 - D25	6 - D25
スターラップ	□ - D13 - 150#		□ - D13 - 150#		□ - D13 - 150#		□ - D13 - 150#		□ - D13 - 150#		□ - D13 - 150#	
腹筋	2 - D13		4 - D13		4 - D13		6 - D13		4 - D13		6 - D13	
備考												

符号	FG13		FG13A		
	位置	両端	中央	他端・中央	Y5端 (1500範囲)
▽ 1. FL (G1.65)	断面図				
B×D	400 x 700		400 x 700	400 x 900	
主筋	上端筋	5 - D25	5 - D25	5 - D25	5 - D25
	下端筋	5 - D25	5 - D25	5 - D25	5 - D25
スターラップ	□ - D13 - 150#		□ - D13 - 150#	□ - D13 - 150#	
腹筋	2 - D13		2 - D13	4 - D13	
備考					



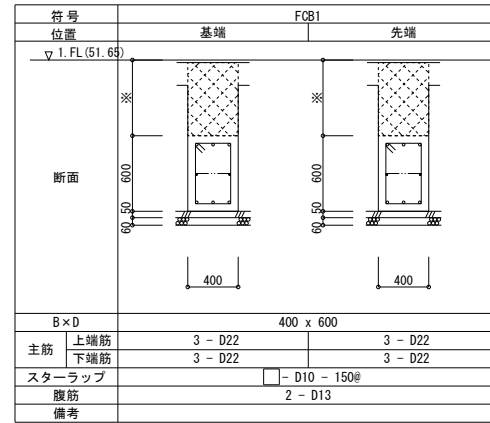
片持ち基礎梁断面リスト S=1:30

- 特記事項
 1. 左右の梁主筋については、可能な限り通し配筋とすること。
 2. 巾止め筋 D10-1,000#
 3. 梁上打増し高さは、スラブ天端に準ずる。
 ※寸法は伏図・軸組図による



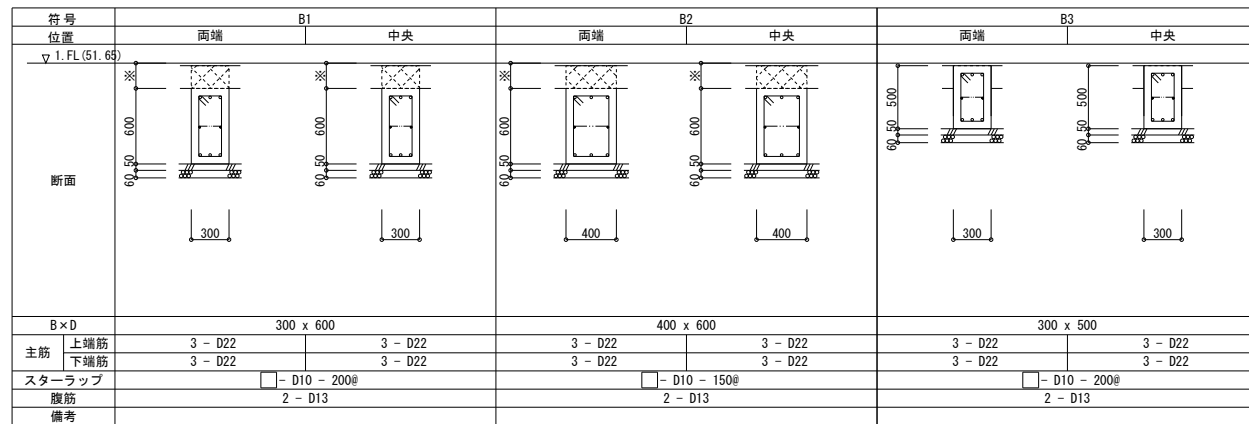
片持ち基礎小梁断面リスト S=1:30

- 特記事項
 1. 左右の梁主筋については、可能な限り通し配筋とすること。
 2. 巾止め筋 D10-1,000#
 3. 梁上打増し高さは、スラブ天端に準ずる。
 ※寸法は伏図・軸組図による



小梁断面リスト S=1:30

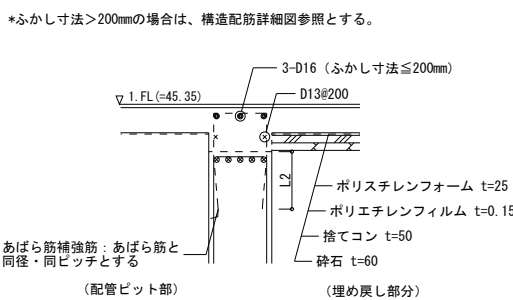
- 特記事項
 1. 左右の梁主筋については、可能な限り通し配筋とすること。
 2. 巾止め筋 D10-1,000#
 3. 梁上打増し高さは、スラブ天端に準ずる。
 ※寸法は伏図・軸組図による



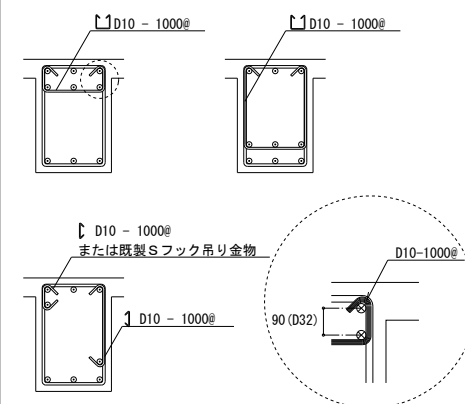
床版断面リスト

符号	床版厚	位置	主筋 短辺		配力筋 長辺	
			端部	中央	端部	中央
S18	180	上端筋	D13 - 200#		D10D13 - 200#	
		下端筋	D10D13 - 200#		D10 - 200#	
CS1	180	上端筋	D13 - 200#		D10D13 - 200#	
		下端筋	D13 - 200#		D10D13 - 200#	

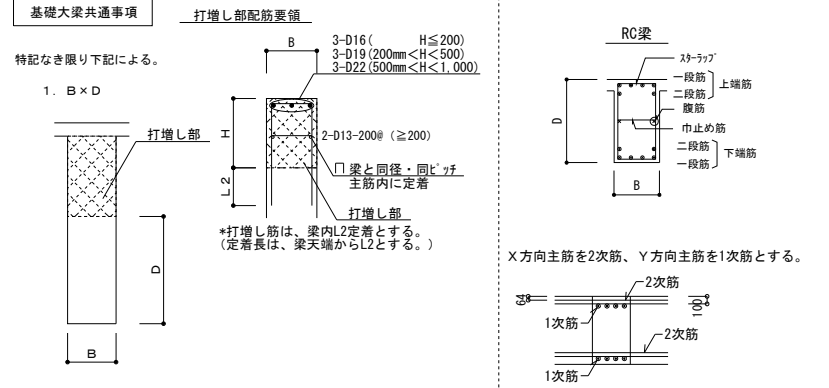
躯体打増し部配筋図



二段筋保持詳細図



共通事項



鉄骨柱断面リスト S=1:30

特記事項 柱型下捨てコンt=90以上（柱脚工法設計施工標準図参照）とする。

符号	SC1	SC2	SC3	SC4
2F				
鉄骨部材	□ - 250 x 250 x 12 (BCR295)	□ - 200 x 200 x 12 (BCR295)	□ - 200 x 200 x 9 (BCR295)	
1F				
鉄骨部材	□ - 250 x 250 x 12 (BCR295)	□ - 200 x 200 x 12 (BCR295)	□ - 200 x 200 x 9 (BCR295)	□ - 150 x 150 x 9 (BCR295)
柱脚断面				
ベースプレート	420 x 420 x 36	360 x 360 x 32	360 x 360 x 28	300 x 300 x 28
アンカーボルト	4-M39 (BPM-SD490)	4-M33 (BPM-SD490)	4-M30 (BPM-SD490)	4-M27 (BPM-SD490)
コンクリート柱断面	630 x 630	560 x 560	560 x 560	500 x 500
立上り筋	12-D19 (SD345)	12-D19 (SD345)	12-D16 (SD345)	12-D16 (SD295)
フープ筋	D13@100 (SD295)	D13@100 (SD295)	D13@100 (SD295)	D13@100 (SD295)

※柱脚工法として国土交通大臣の認定又は日本建築センターの評価を取得した柱脚とし、下記の条件を満足するものとする。
 ① 柱脚の回転剛性は上記の値以上とする。
 ② 「柱とベースプレートの接合」「アンカーボルトの保持及び埋設」「ベースプレート下均しモルタル」については認定条件又は評価条件および各メーカーの設計施工標準に準拠する。

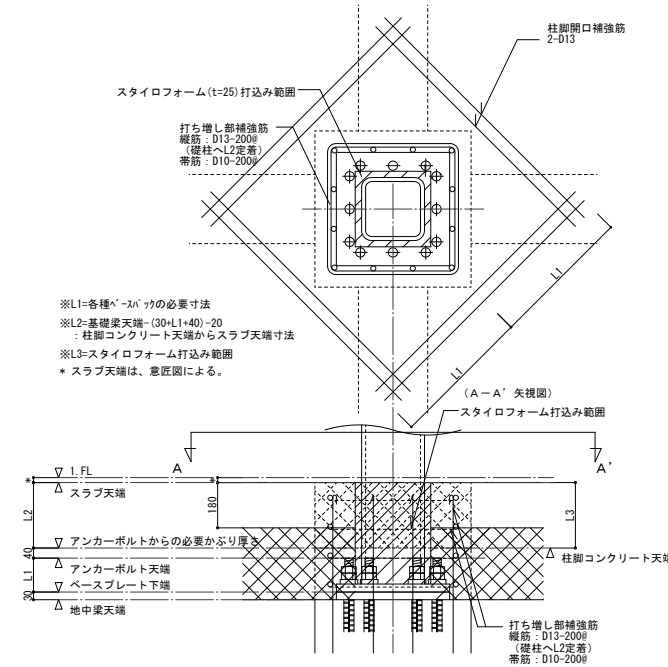
鉄骨間柱断面リスト S=1:30

特記事項 鉄骨材質はSS400とする。ガセットプレートは母材と同等とする。ボルト材質はS10Tとする。

符号	SP1	SP2	SP3
	全断面	全断面	全断面
断面			
部材	□ - 150 x 150 x 9 (BCR295)	H - 100 x 100 x 6 x 8	○ - 165.2φ x 11 (STK400)
継手	フランジ ウェブ	PL - 9 HTB. 2 - M16 S. PL - 9	PL - 6 HTB. 2 - M16
A. Bolt	HTB. 4 - M20	A. Bolt 2-M16 L=400 D. N. (SS400)	A. Bolt 4-M22 L=550 D. N. (SNR400B)
B. PL	B. PL-16 x 300 x 200 (SN400B)	B. PL-12 x 300 x 125 (SN400B)	B. PL-25 x 290 x 290
備考			

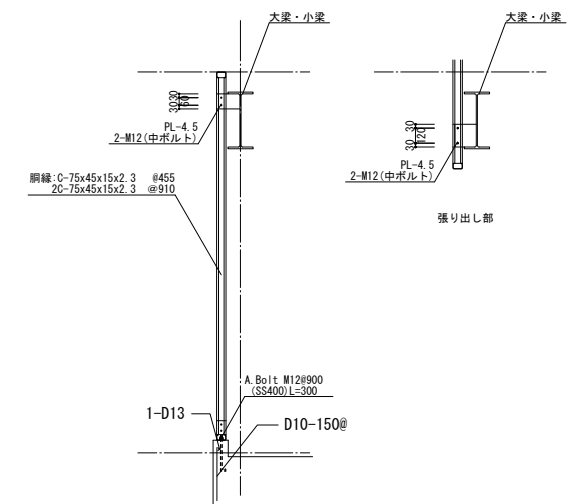
柱脚部詳細

・柱脚部については、基礎梁天端からアンカーボルトからの必要かぶり厚さまで(50+L1+40)をコンクリートで充填し、柱脚コンクリート天端からスラブ天端までの範囲にスタイロフォームを打込みこと。
 ・柱脚コンクリート天端とスラブ天端が同一レベルの場合は、スタイロフォームは打込まなくてよい。

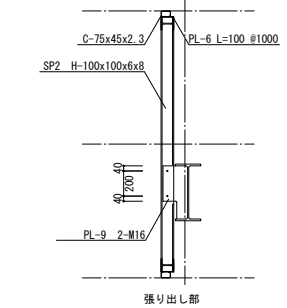


※L1=各種「L」の必要寸法
 ※L2=基礎梁天端-(30+L1+40)-20
 ・柱脚コンクリート天端からスラブ天端寸法
 ※L3=スタイロフォーム打込み範囲
 ・スラブ天端は、意匠図による。

鋼線要領図 S=1:30



SP2詳細図 S=1:30



工事名 野寺放課後児童保育室建設工事

図面名 鉄骨柱断面リスト

縮尺

A1:1:30
A3:1:60

図面番号
S-22

鉄骨大梁断面リスト S=1:30

特記事項
 特記なき鉄骨材質はSM400Bとする。ガセットプレートは母材と同等とする。
 特記なき鉄骨梁継手位置は伏図・軸図参照。ボルト材質はS10Tとする。()内はピン継手とする。

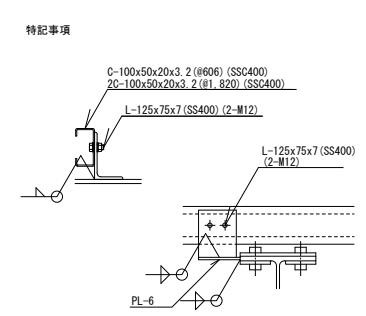
符号位置	SG1		SG1A		SG2		SG3	
	端部	中央	端部	中央	端部	中央	端部	中央
RF 姿断面								
部材(SIZE)	H - 350 x 175 x 7 x 11		H - 350 x 175 x 7 x 11		H - 350 x 175 x 7 x 11		H - 350 x 175 x 7 x 11	
継手	Flange Web		2PL - 9 HTB. 4 - M20 2PL - 6 HTB. 3 - M20		2PL - 9 HTB. 4 - M20 2PL - 6 HTB. 3 - M20		2PL - 9 HTB. 4 - M20 2PL - 6 HTB. 2 - M20	
備考								
2F 姿断面								
部材(SIZE)	H - 450 x 200 x 9 x 14		H - 450 x 200 x 9 x 14		H - 450 x 250 x 9 x 16		H - 450 x 250 x 9 x 16	
継手	Flange Web		2PL - 12 HTB. 6 - M20 2PL - 9 HTB. 5 - M20		2PL - 12 HTB. 8 - M20 2PL - 9 HTB. 5 - M20		2PL - 9 HTB. 4 - M20 2PL - 6 HTB. 2 - M20	
備考								

符号位置	SG4		SG5	
	端部	中央	端部	中央
RF 姿断面				
部材(SIZE)	H - 244 x 175 x 7 x 11		H - 244 x 175 x 7 x 11	
継手	Flange Web		2PL - 9 HTB. 4 - M20 2PL - 9 HTB. 2 - M20	
備考				
2F 姿断面				
部材(SIZE)	H - 150 x 150 x 7 x 10		H - 150 x 150 x 7 x 10	
継手	Flange Web		2PL - 9 HTB. 4 - M16 2PL - 9 HTB. 2 - M16	
備考				

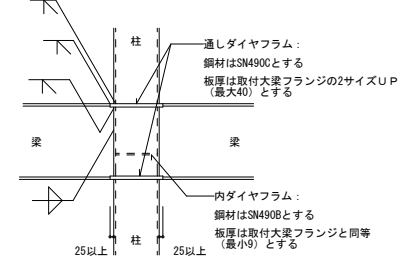
水平ブレースリスト

符号	LV16
断面	JISターンバックル筋かい
部材	1-M16
端部仕様	PL-9 HTB 1 - M16
備考	G. PLの必要幅B ≥ 70 必要溶接長L ≥ 80 ※両側隅肉溶接とする。

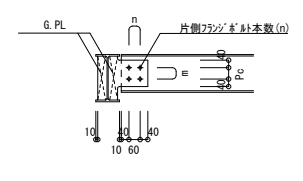
母屋取付詳細 S=1/10



柱梁仕口リスト



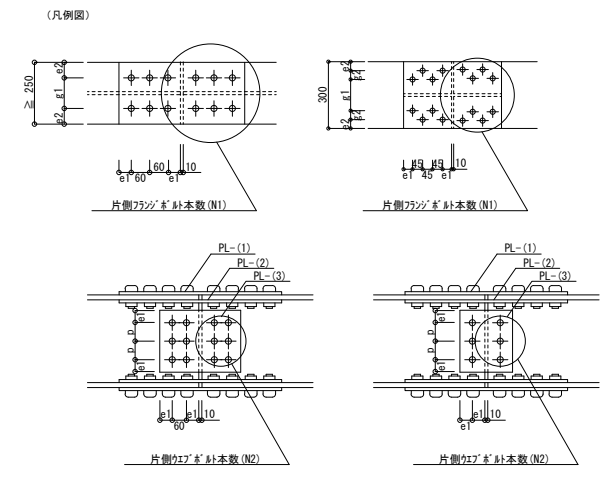
鉄骨小梁継手リスト



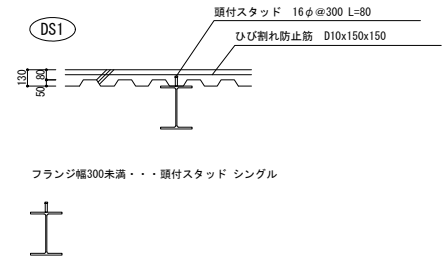
特記なき限り 高力ボルト：S10T 鉄骨材質：スプライスプレートは母材と同等とする。
 特記なき限り1面せん断とする。

部材	ウェブ継手				
	H. T. B (n)	m x n	Pc (mm)	G. PL	備考
H - 300 x 150 x 6.5 x 9 (SB1)	3 - M16	3 x 1	60	PL - 9	
H - 250 x 125 x 6 x 9 (SB2)	3 - M16	3 x 1	60	PL - 6	
H - 200 x 100 x 5.5 x 8 (SB3)	2 - M16	2 x 1	60	PL - 6	
H - 200 x 100 x 5.5 x 8 (SB3A)	4 - M16	2 x 2	60	PL - 6	
H - 150 x 75 x 5 x 7 (SB4)	2 - M16	1 x 2	60	PL - 6	
H - 150 x 75 x 5 x 7 (SB4A)	3 - M16	1 x 3	60	PL - 6	
H - 150 x 150 x 7 x 10 (SB5)	2 - M16	1 x 2	60	PL - 9	
H - 300 x 150 x 6.5 x 9 (SB6)	4 - M20	4 x 1	60	PL - 9	
H - 125 x 125 x 6.5 x 9 (HB1)	2 - M16	1 x 2	60	PL - 9	
H - 100 x 100 x 6 x 8 (HB2)	2 - M16	1 x 2	60	PL - 9	
H - 450 x 200 x 9 x 14 (SG1)	6 - M20	6 x 1	60	PL - 9	

鉄骨大梁継手リスト



デッキプレートリスト



継手記号	フランジ			ウェブ		ピッチ、はしあき、ゲージ					備考
	外添板 PL-(1)	内添板 PL-(2)	N 1-径	添板寸法 PL-(3)	N 2-径	p	e1	e2	g1	g2	
SJ1	PL-12 x 410	2PL-12 x 80	HTB. 6-M20	PL-9 x 320 x 170	HTB. 5-M20	120	40	40	120	-	
SJ2	PL-12 x 410	2PL-12 x 100	HTB. 8-M20	PL-9 x 320 x 170	HTB. 5-M20	60	40	50	150	-	
SJ3	PL-9 x 290	2PL-9 x 70	HTB. 4-M20	PL-6 x 260 x 170	HTB. 3-M20	90	40	35	105	-	
SJ4	PL-9 x 290	2PL-9 x 60	HTB. 4-M20	PL-6 x 200 x 170	HTB. 2-M20	120	40	30	90	-	
SJ5	PL-9 x 290	2PL-9 x 70	HTB. 4-M20	PL-9 x 140 x 170	HTB. 2-M20	60	40	40	105	-	
SJ6	PL-9 x 290	2PL-9 x 60	HTB. 4-M16	PL-9 x 80 x 290	HTB. 2-M16	60	40	30	90	-	
SJ7	PL-16 x 290	-	HTB. 4-M16	PL-6 x 140 x 70	HTB. 2-M16	60	40	22	56	-	

鉄骨小梁断面リスト S=1:30

特記事項
 鉄骨材質はSM400Bとする。
 特記なき限りガセットプレートは母材と同等とする。ボルト材質はS10Tとする。

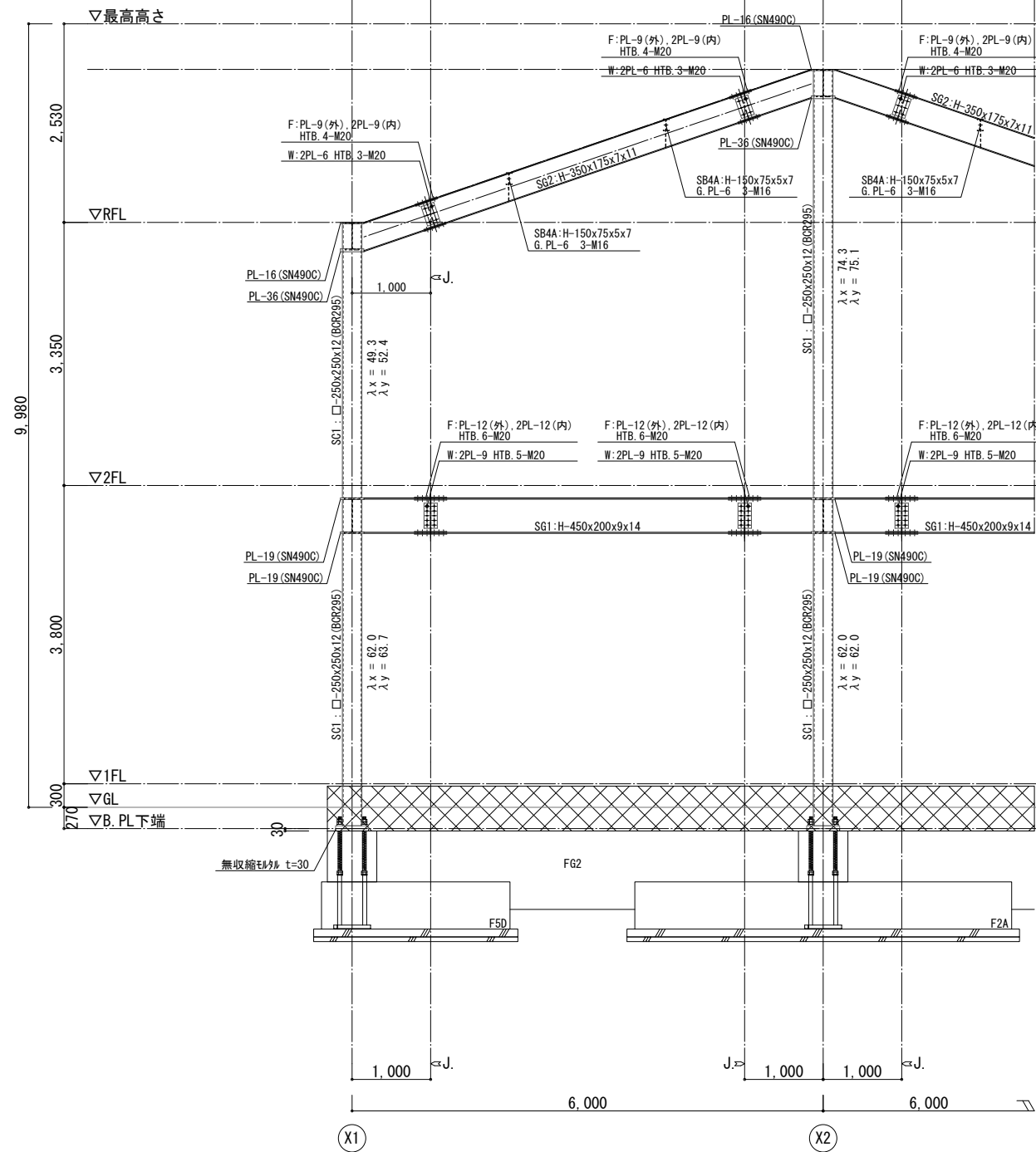
符号	SB1	SB2	SB3・SB3B, SB3A	SB4, SB4A	SB5	SB6	HB1	HB2
	全断面	全断面	全断面	全断面	全断面	全断面	全断面	全断面
姿断面								
部材	H - 300 x 150 x 6.5 x 9	H - 250 x 125 x 6 x 9	H - 200 x 100 x 5.5 x 8	H - 150 x 75 x 5 x 7	H - 150 x 150 x 7 x 10	H - 300 x 150 x 6.5 x 9	H - 125 x 125 x 6.5 x 9 (横使い)	H - 100 x 100 x 6 x 8 (横使い)
継手	フランジ ウェブ	PL - 9 HTB. 3 - M16 PL - 6 HTB. 3 - M16	PL - 6 HTB. 2 - M16 SB3A PL-6 HTB. 4-M16	PL - 6 HTB. 2 - M16 SB4A PL-6 HTB. 3-M16	PL - 9 HTB. 2 - M16 PL - 9 HTB. 4 - M20	PL - 9 HTB. 2 - M16 PL - 9 HTB. 4 - M20	PL - 9 HTB. 2 - M16 G. PL-9 2-M16 SP2	PL - 9 HTB. 2 - M16 G. PL-9 2-M16 SP2
備考								

工事名 野寺放課後児童保育室建設工事

図面名 鉄骨部材断面リスト

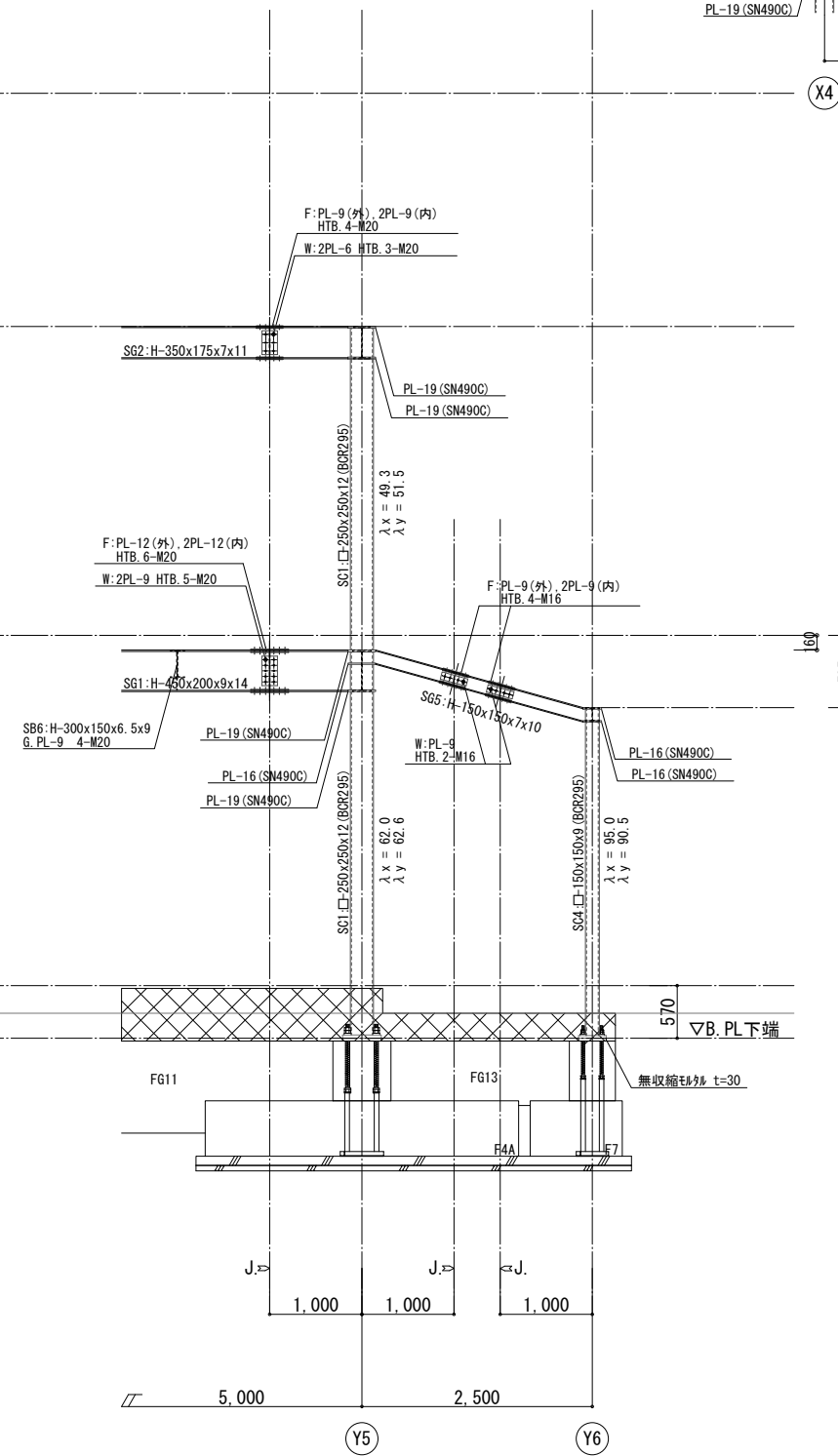
縮尺 A1:1:10, 30
A3:1:20, 60

図面番号 S-23



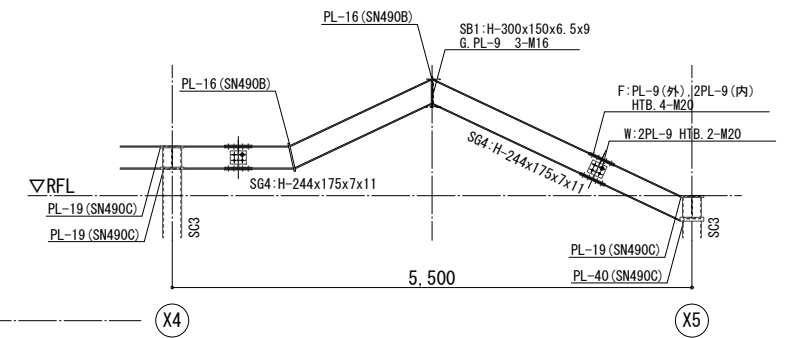
Y1通り鉄骨架構詳細図 S=1:40

- 特記事項
 1. 特記なき鉄骨部材はSN400Bとする。

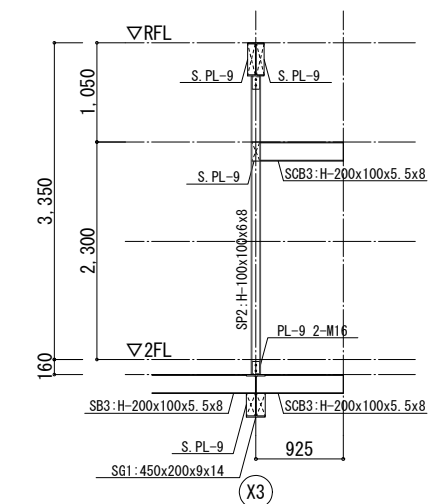


X1通り鉄骨架構詳細図 S=1:40

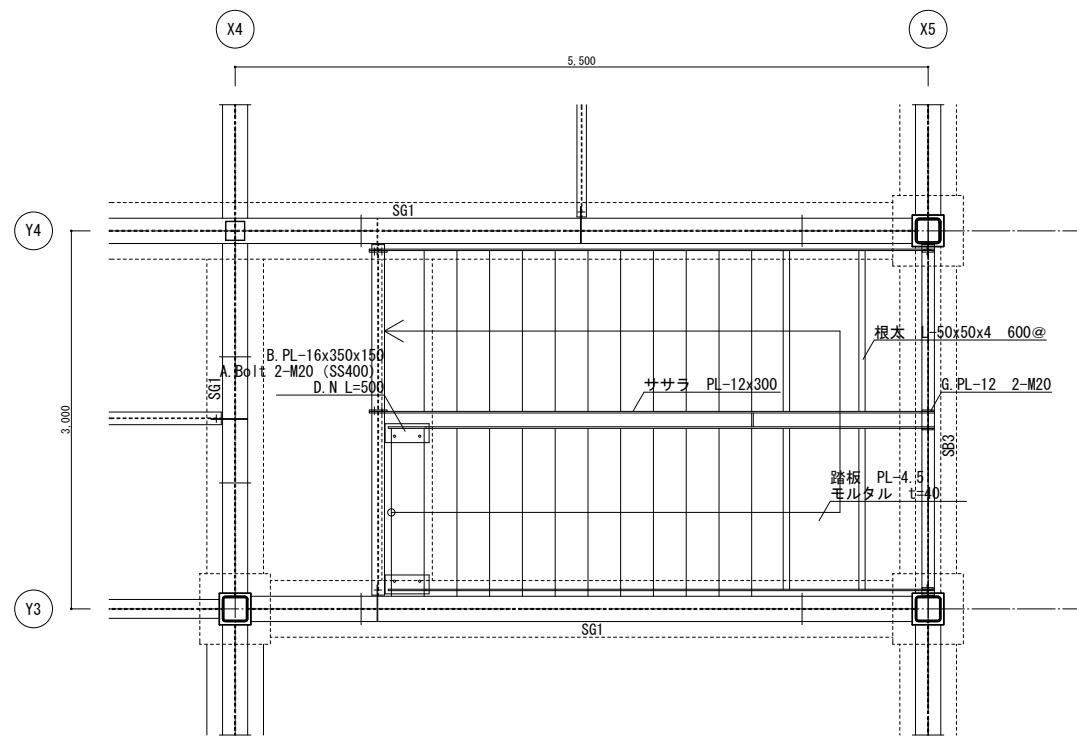
- 特記事項
 1. 特記なき鉄骨部材はSN400Bとする。
 2. 鉄骨露出部は溶融亜鉛メッキ処理とし、高力ボルトはF8Tとする。



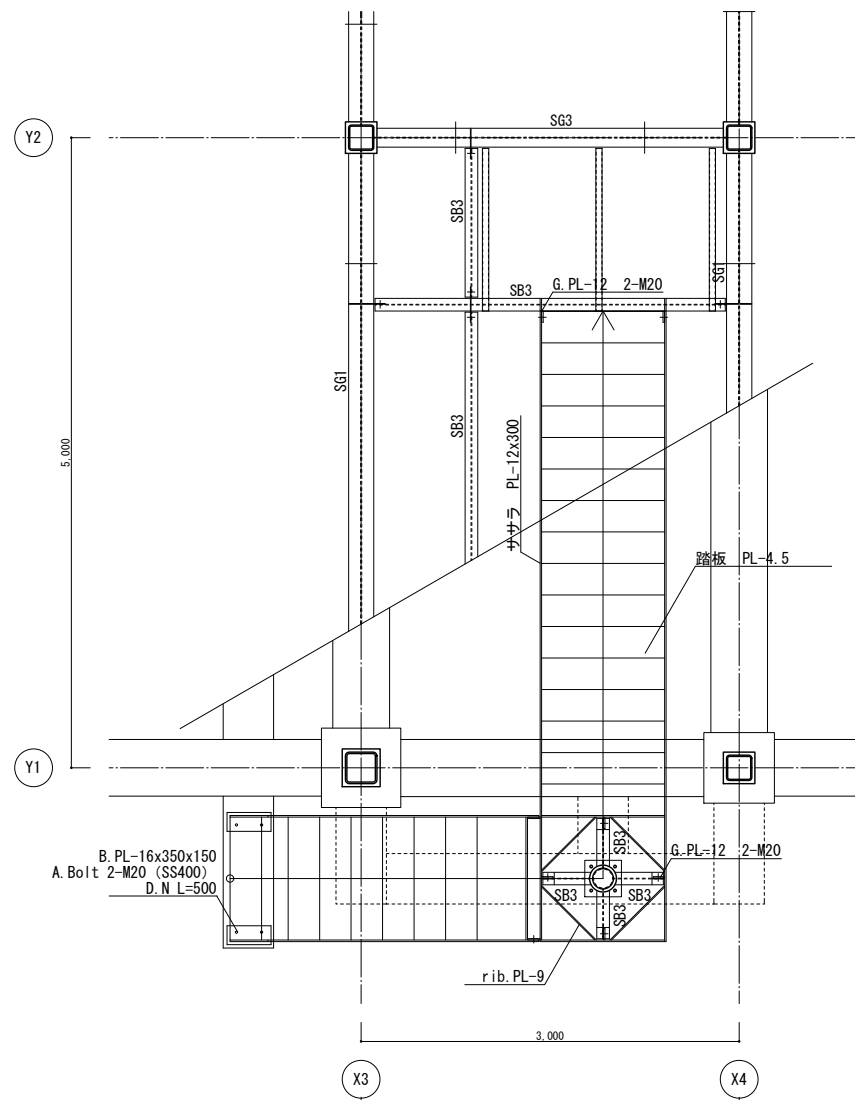
Y3通り鉄骨詳細図 S=1:40



Y1+705通りSP2鉄骨詳細図 S=1:40

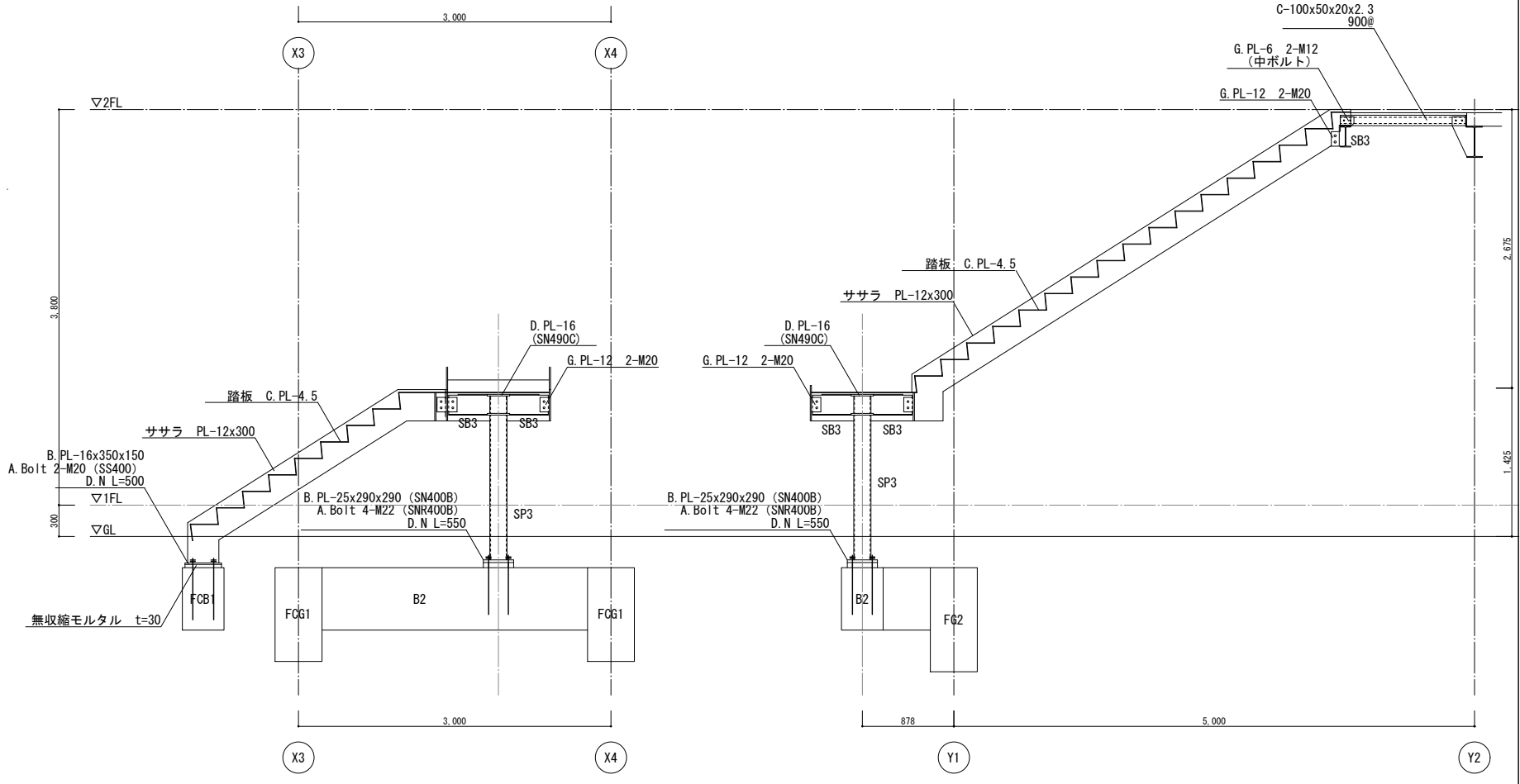
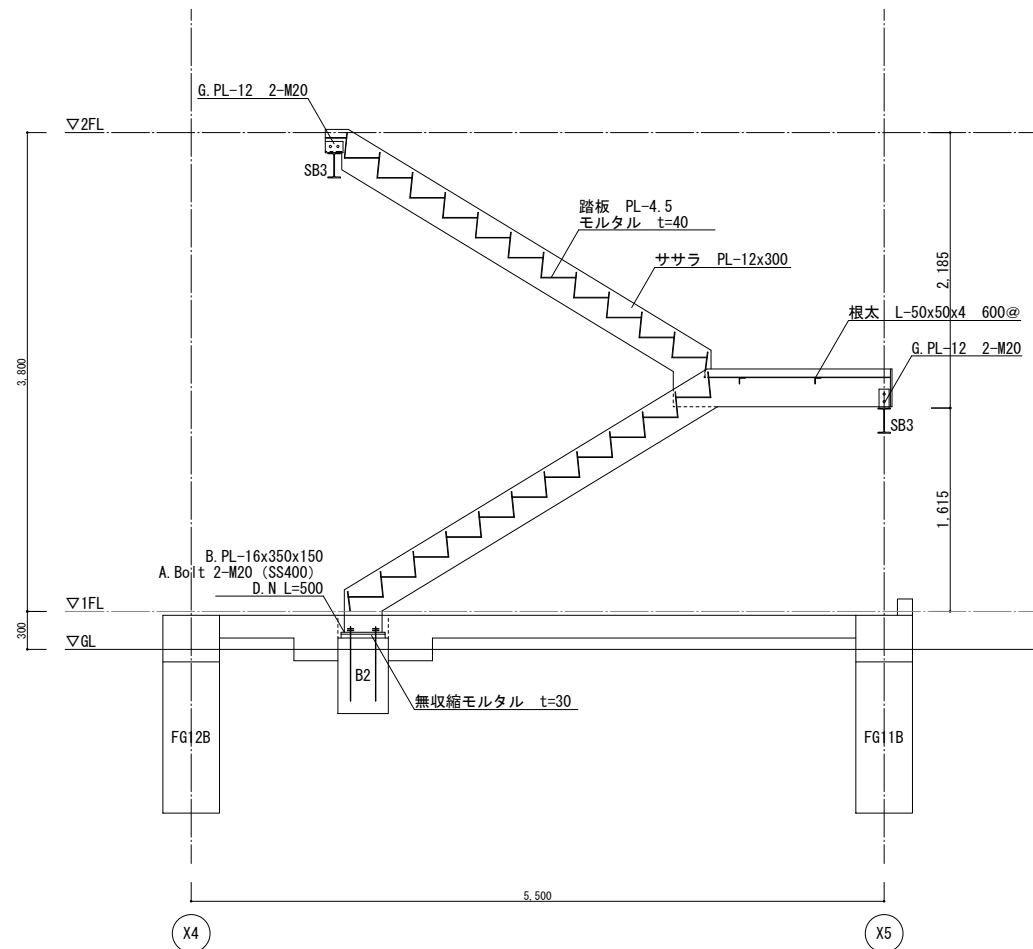


屋内鉄骨階段詳細図 S-1:30

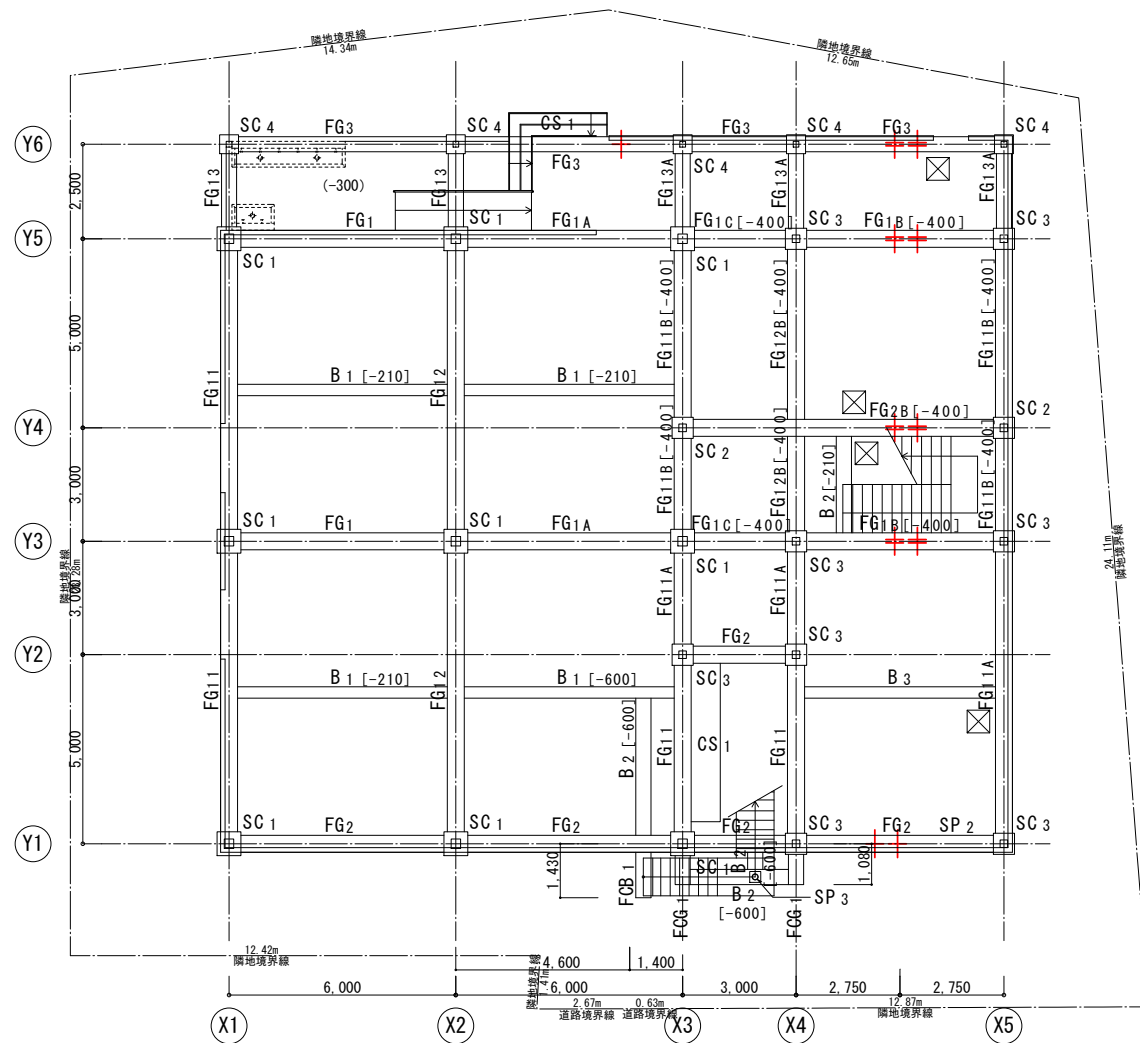


屋外鉄骨階段詳細図 S-1:30

※屋外階段の露出部分は、溶融亜鉛メッキ処理とする。
溶融亜鉛メッキ処理部分の高力ボルトは、F8Tとする。



野寺放課後児童保育室建設工事		縮尺		図面番号	
鉄骨階段詳細図		A1:1:30 A3:1:60		S-25	



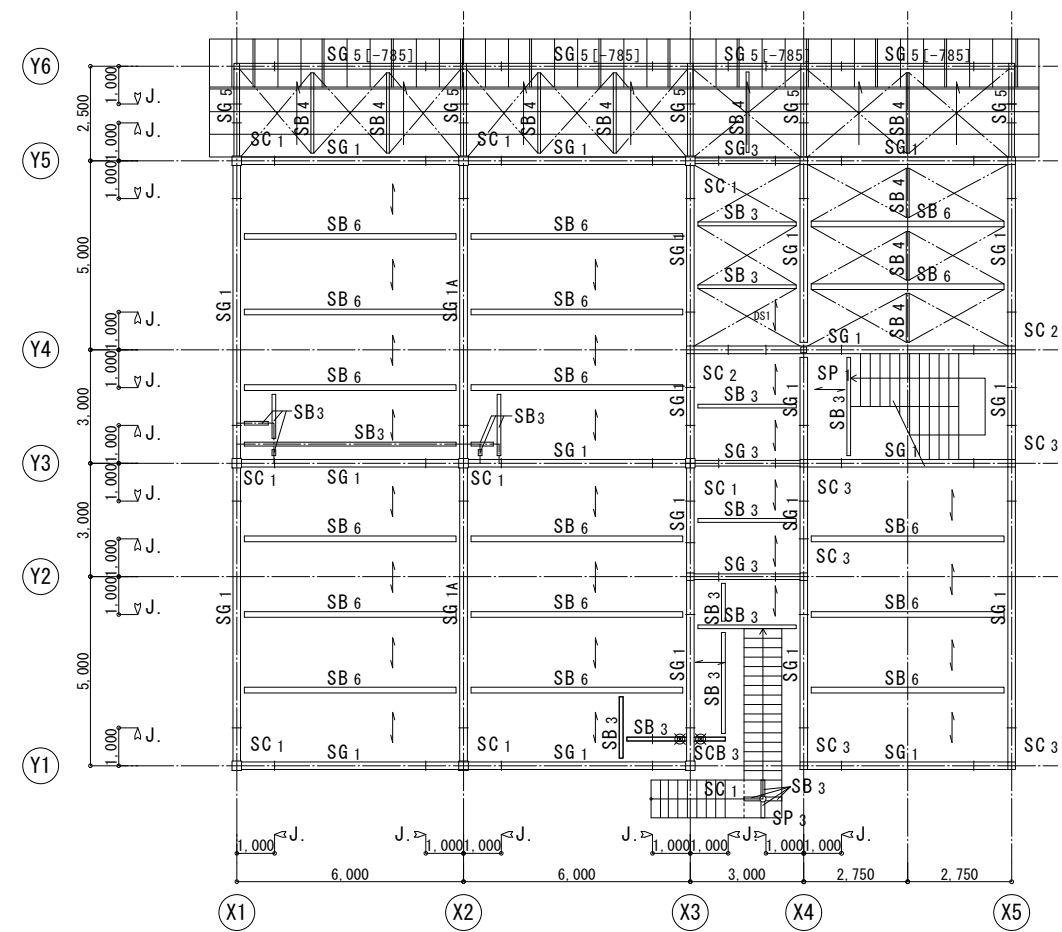
1階床伏図 S=1:100

特記事項

- 1FL=51.65m(標高TP) GL=1FL-300
- []内の数字は、FLからの梁天端高さを示す。
- ()内の数字は、FLからのスラブ天端高さを示す。
- ☒ 上部床下点検口 600x600 (防臭・防水)

特記なき限り下記による

1. 基礎梁天端レベルは、1FL-600とする。
2. 小梁・スラブ天端レベルはFL-30とする。



2階床伏図 S=1:100

特記事項

- 2FL=1FL+3.800
- []内の数字は、FLからの梁天端高さを示す。
- ()内の数字は、FLからのスラブ天端高さを示す。
- 印は水平(層横) プレースLV16を示す。

特記なき限り下記による

1. 2FL梁天端レベルは、FL-160とする。
2. 2FLスラブ天端レベルは、FL-30とする。

凡例
梁貫通孔補強記号を示す。

区分	径	100	125	150	200	600
建築		+	+	+	+	+